



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]

大 阪 大 学 ・ 京 都 大 学

公共圏における科学技術 活動報告

2024

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	3
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	4
1. 教育プログラムの実施	7
• 大阪大学の取り組み	8
• 大阪大学 特色ある授業	19
• 京都大学の取り組み	21
• 京都大学 特色ある授業	26
• 合同講義	28
• 阪大学生の声	33
• 京大学生の声	34
• STiPS 修了生ネットワーキング	36
2. プログラム推進委員会の運営	37
• 実施体制	38
• カリキュラムの調整	39
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	40
3. SciREX 事業への参画	45
• サマーキャンプへの参画	46
• 他拠点への講師派遣	50
• 研修などへの講師派遣	50
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	51
• 「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発	52
5. 共進化実現プログラムの実施	55
• ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発	56
• 科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究	57
6. 関西ネットワークの発展	59
• STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）	60
• サイエンスカフェ@千里公民館	69
• その他	70
7. 国際連携の推進	71
• 国際連携	72
• 海外調査及び発表等	72

8.	STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）	73
•	大阪大学	74
•	京都大学	80

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」（*Select Committee on Science and Technology 2000*）

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物（GM）論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画（2011年）においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠（エビデンス）」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多

様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与（public engagement）」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階（アジェンダ形成段階）を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題（期待や懸念、問題）を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいのかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 設立拠点長 小林傳司（大阪大学）

❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere：STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をより的確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2025 年 3 月現在）

大 阪 大 学			
小林 傳司	大阪大学	名誉教授／設立拠点長	科学哲学、科学技術社会論
平川 秀幸	大阪大学 CO デザインセンター	教授／拠点長	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学 CO デザインセンター	教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
辻田 俊哉	大阪大学 CO デザインセンター	准教授	国際関係論
松村 悠子	大阪大学 CO デザインセンター	特任講師	環境社会学、島嶼研究
鹿野 祐介	大阪大学 CO デザインセンター	特任助教	人とヒトをめぐる哲学・倫理学、哲学対話教育
武田 浩平	大阪大学 CO デザインセンター	特任助教（非常勤）	動物行動学、科学コミュニケーション論
小林 万里絵	大阪大学 CO デザインセンター	特任研究員（非常勤）	科学コミュニケーション
神里 達博	大阪大学 CO デザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データビリティフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授	科学社会学、科学技術社会論、科学技術政策論
水町 衣里	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授／URA	科学コミュニケーション論、科学教育
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
井出 和希	大阪大学感染症総合教育研究拠点	特任准教授	社会医学、疫学、政策科学、応用倫理学
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」

京 都 大 学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授／ユニット長	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	教授	科学哲学、倫理学
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
伊藤 順一	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経済学、応用ミクロ経済学、計量経済学
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
中山 健夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
羽生 雄一郎	京都大学公共政策大学院	特別教授	地方自治、地方税財政
広井 良典	京都大学人と社会の未来研究院	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
カール・ベッカー	京都大学大学院医学研究科	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
森川 輝一	京都大学公共政策大学院	教授	政治理論、政治思想史
関山 健	京都大学総合生存学館	教授	国際政治経済学、国際環境政治学、開発政治学
丹羽 良太	京都大学 iPS 細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
山下 恭範	京都大学経済研究所	特定准教授	公共政策全般、政策課程論
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
祐野 恵	京都大学大学院医学研究科	特定講師	公共政策、地方自治、地方議会
小泉 志保	京都大学大学院医学研究科	特定助教	社会医学、ヘルスコミュニケーション、グローバルヘルス

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

大阪大学の取り組み

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」、大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまともりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

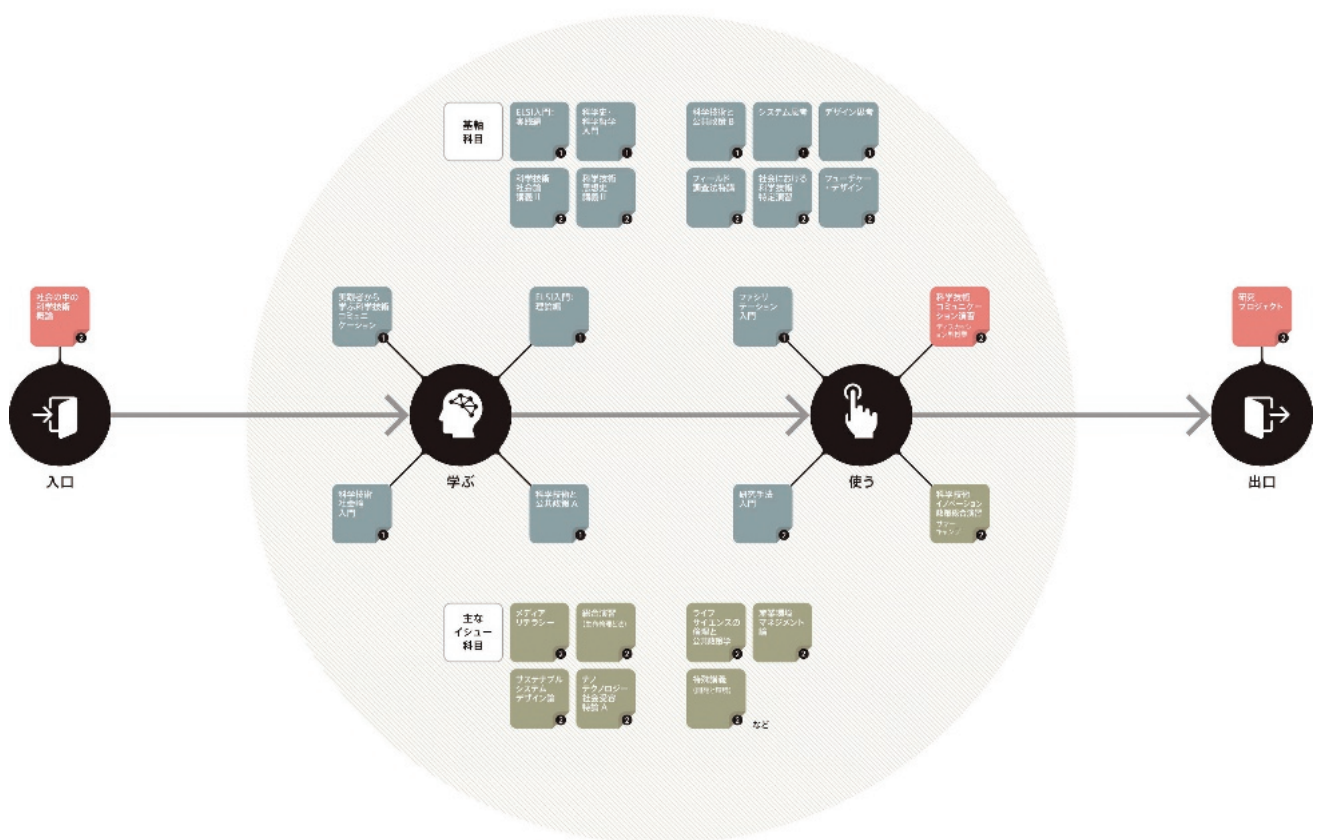


図 副専攻／高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の科目

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」概要

2022 年 4 月からは、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」を修了した後の博士後期課程の学生を対象とした発展コースとして、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」を新設しました。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」で取り組んだ研究プロジェクトなどを継続・発展させた研究活動（学会発表や論文公表、一般社会へのアウトリーチ活動などを含む）を行うことを目標にします。通常 2～3 年間での修了を想定しています。修了には必修科目 12 単位および選択科目 2 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2024 年度 在籍者数の合計：19 人

履修登録者数：11 人（所属研究科内訳 人間科学：2 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：2 人、人文学：2 人）

修了者数：5 人（進路内訳 在学中：3 人、進学：2 人）

*副専攻プログラムの修了証は 2019 年度までは、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、薬学：1 人、工学：2 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：3 人、工学：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学：2 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：1 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、基礎工学：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳 民間企業：3 人）

2019 年度

履修登録者数：17 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 進学：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：6 人、薬学：1 人）

修了者数：8 人（進路内訳 在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人、不明：1 人）

2021 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：3 人、基礎工学：1 人、薬学：1 人、工学：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：5 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：3 人）

2022 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学：2 人、理学：3 人、工学：2 人、情報科学：1 人、人文学：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 内部進学：1 人、民間企業：1 人）

2023 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、基礎工学：2 人、人文学：5 人）

修了者数：7人（進路内訳 在学中4人、民間企業等：3人）

高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2024 年度 在籍者数の合計：26 人

履修登録者数：21 人（所属研究科内訳 人間科学：2 人、法学：1 人、理学：3 人、工学：7 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、人文学：5 名）

修了者数：14 人（進路内訳 在学中：11 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

*高度副プログラムの修了証は 2019 年度までは、学生が副専攻の 8 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、8 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 8 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

また、履修登録者数は、2023 年度から、副専攻プログラム登録者は高度副プログラムにも同時に登録しているため、人数計上には重複があります。ただし、高度副プログラムを修了後に、引き続き副専攻プログラムに改めて新規登録する場合や、副専攻プログラムに登録していた者が、主専攻の修了時に、14 単位以上には達しなかったが、8 単位以上が履修済みであれば、その時点で高度副プログラムに登録して修了とする場合があります、一年度で数名程度、そのような場合があります。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：3 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：1 人、工学：4 人、基礎工学：3 人、国際公共政策：2 人、生命機能：1 人）
修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：5 人

2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、法学：1 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）
修了者数：8 人

2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：2 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、国際公共政策 1 人）
修了者数：8 人

2018 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、医学系：3 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人）
修了者数：4 人

2019 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 理学：3 人、医学系：2 人、工学：1 人）
修了者数：4 人

2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人）
修了者数：9 人

2021 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 人間科学 1 人、経済学 1 人、理学 2 人、基礎工学 1 人、工学 1 人、国際公共政策：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：1 人）

2022 年度

履修登録者数：13 人（所属研究科内訳 人間科学：2 人、理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人、人文学：2 人）
修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、その他：2 人）

2023 年度

履修登録者数：16 人（所属研究科内訳 人間科学：3 人、理学：4 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人、人文学：4 人）

修了者数：18 人（進路内訳 在学中：12 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業等：2 人、不明：3 人）

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2024 年度 在籍者数の合計：2 人

修了者数：1 人（進路内訳 大学 1 人）

*副専攻プログラムの修了証は 2019 年度までは、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2022 年度

履修登録者数：3 人（所属研究科内訳 理学：2 人、人文学：1 人）

修了者数：0 人

2023 年度

履修登録者数：1 人（所属研究科内訳 情報科学：1 人）

修了者数：0 人

大阪大学 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧
(2024 年度)

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
入門必修科目：2 単位	CO デザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
必修科目：2 単位	CO デザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
連携必修科目：2 単位	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年
選択必修科目：8 単位以上（選択科目ⅠおよびⅡから、それぞれ2 単位以上を履修）	選択必修科目Ⅰ：基軸科目群	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：理論編	八木 絵香、他	1 夏
		CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：実践編	八木 絵香、他	1 集中（秋）
		CO デザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2 秋～冬
		CO デザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1 春
		CO デザインセンター（院）	実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション	八木 絵香、他	1 冬
		CO デザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1 春
		CO デザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1 夏
		CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 A	辻田 俊哉	1 春
		CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 B	辻田 俊哉	1 夏
		CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 A		1 不開講
		CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 B		1 不開講
		CO デザインセンター（院）	システム思考	山崎 吾郎、他	1 集中（春～夏）
		CO デザインセンター（院）	デザイン思考	大谷 洋介、他	1 集中（春～夏）
		人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論講義Ⅱ	中村 征樹、他	2 春～夏
		人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史講義Ⅱ	中村 征樹	2 秋～冬
		人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2 春～夏
		人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2 秋～冬
		工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2 春～夏
	選択必修科目Ⅱ：イシュー科目群	CO デザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2 集中（夏）
		CO デザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2 集中（秋）
		法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2 秋～冬
		法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2 秋～冬
		医学系研究科（修士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2 集中（夏）
		工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2 春～夏
		工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2 春～夏
		基礎工学研究科（博士前期） （エマージングサイエンスデザイン R ³ センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2 集中（春～夏）
		基礎工学研究科（博士前期） （エマージングサイエンスデザイン R ³ センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 B		2 不開講
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2 秋～冬
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2 秋～冬

大阪大学 高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」(修了要件 8 単位以上) 開講科目一覧(2024 年度)

科目カテゴリー	開講部局 (課程)	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目：2 単位	CO デザインセンター (院)	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中 (夏)
選択科目：6 単位以上	CO デザインセンター (院)	倫理的・法的・社会的課題 (ELSI) 入門：理論編	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター (院)	倫理的・法的・社会的課題 (ELSI) 入門：実践編	八木 絵香、他	1	集中 (秋)
	CO デザインセンター (院)	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	CO デザインセンター (院)	ファンリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター (院)	実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション	八木 絵香、他	1	冬
	CO デザインセンター (院)	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター (院)	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 A	辻田 俊哉	1	春
	CO デザインセンター (院)	科学技術と公共政策 B	辻田 俊哉	1	夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 A		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	科学技術と国際政治 B		1	不開講
	CO デザインセンター (院)	システム思考	山崎 吾郎、他	1	集中 (春～夏)
	CO デザインセンター (院)	デザイン思考	大谷 洋介、他	1	集中 (春～夏)
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術社会論講義Ⅱ	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科 (博士前期)	科学技術思想史講義Ⅱ	中村 征樹	2	秋～冬
	人間科学研究科 (博士前期)	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科 (博士前期)	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科 (博士前期)	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	CO デザインセンター (院)	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中 (夏)
	CO デザインセンター (院)	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中 (秋)
	法学研究科 (博士前期)	総合演習 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科 (博士後前期)	特定研究 (生命倫理と法)	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科 (修士課程)	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中 (夏)
	工学研究科 (博士前期)	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科 (博士前期)	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科 (博士前期) (イノベーションデザイン R ² センター提供)	ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2	集中(春～夏)
	基礎工学研究科 (博士前期) (イノベーションデザイン R ² センター提供)	ナノテクノロジー社会受容特論 B		2	不開講
	国際公共政策研究科 (博士前期)	特殊講義 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科 (博士後前期)	特殊研究 (開発と環境)	大槻 恒裕	2	秋～冬

大阪大学 副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2024 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
必修科目：12 単位	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 1	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 2	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 3	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 4	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 5	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
	CO デザインセンター（院）	研究プロジェクト 6	平川 秀幸、他	2	春～夏／秋～冬
選択科目：2 単位 * 学問諸分野を広く理解するために、原則として副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の在籍時に、履修していない科目を履修	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：理論編	八木 絵香、他	1	夏
	CO デザインセンター（院）	倫理的・法的・社会的課題（ELSI）入門：実践編	八木 絵香、他	1	集中（秋）
	CO デザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	CO デザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	CO デザインセンター（院）	実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション	八木 絵香、他	1	冬
	CO デザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 A	辻田 俊哉	1	春
	CO デザインセンター（院）	科学技術と公共政策 B	辻田 俊哉	1	夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 A		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	科学技術と国際政治 B		1	不開講
	CO デザインセンター（院）	システム思考	山崎 吾郎、他	1	集中（春～夏）
	CO デザインセンター（院）	デザイン思考	大谷 洋介、他	1	集中（春～夏）
	人文学研究科（博士前期）	科学技術社会論講義Ⅱ	中村 征樹、他	2	春～夏
	人文学研究科（博士前期）	科学技術思想史講義Ⅱ	中村 征樹	2	秋～冬
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原 圭史郎、他	2	春～夏
	CO デザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	CO デザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋）
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（修士課程）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏、他	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （イマージングサイエンス・イノベーションセンター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 A	竹田 精治、他	2	集中（春～夏）
	基礎工学研究科（博士前期） （イマージングサイエンス・イノベーションセンター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論 B		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬

🍁 大阪大学 特色ある授業

「社会の中の科学技術概論」(春・夏学期 隔週水曜 5・6限)

この科目は、ゲストレクチャーと学生同士のグループディスカッションとがセットになったオムニバス形式の講義・演習スタイルで運営されています。

社会の中で科学技術はどのような役割を果たし、どのような問題を惹起しているのか、人間・社会にとって望ましい成果を生み出すにはどうしたらよいのか、研究者や政策決定者、事業者、市民にはどのような責任や役割があるのかについて、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題 (Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)」の観点から、多角的に考えました。第5回までは講義、第6回以降はゲストによる講義(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)を行いました。各回の講義内容及び担当した講師は以下の通りです(ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。

「社会の中の科学技術概論」

第1・2回(2024年4月10日)

「イントロダクション」平川 秀幸(大阪大学 教授)

「社会の中の科学、社会のための科学：ブダベスト宣言から20+5年」

小林 傳司(大阪大学名誉教授)

第3回(2024年4月24日)

「現代の科学技術イノベーション政策の動向～規範化するイノベーション～」

平川 秀幸(大阪大学 教授)

第4・5回(2024年5月8日)

「科学技術コミュニケーション」

八木 絵香(大阪大学 教授)

「イノベーション論入門」

辻田 俊哉(大阪大学 准教授)

第6・7回(2024年5月22日)

「現代社会における科学技術の諸問題(1)AIと法」

赤坂 亮太(大阪大学 准教授)

第8・9回(2024年5月29日)

「現代社会における科学技術の諸問題(2)研究公正、学術情報流通」

井出 和希(大阪大学 特任准教授)

第10・11回(2024年6月12日)

「現代社会における科学技術の諸問題(3)地震予知と社会」

大木 聖子(慶応義塾大学 准教授)

第12・13回(2024年6月26日)

「イノベーションとSF思考」

宮本 道人(北海道大学 特任助教)

第14・15回(2024年7月10日)

「総合討論」平川 秀幸(大阪大学 教授)



「科学技術コミュニケーション演習」（集中講義〔夏〕）

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。

2024年度は「公共放送で活用される手話 CG 生成技術」をグループ討議の課題として取り上げました。講義は、聴覚障がい者が置かれる状況やメディアアクセシビリティ技術の最先端についての事前レクチャーから始まり、グループワークとして「公共放送で活用される手話 CG 生成技術開発について配慮すべき事項（起こりうる課題）を作成する」という課題に取り組みました。1日目のディスカッションに続いて2日目は当事者の方々と意見交換を行い、配慮すべき事項をまとめるという流れでした。最後に、この課題に対して自らの専門分野から貢献できることについて個人ワークでレポートを作成しました。

3日間のスケジュールと内容は次の通りです。主に、グループワークを中心に進められました。

1日目（9月25日）

オリエンテーションと自己紹介

公共放送で活用される手話 CG 生成技術開発について配慮すべき事項（起こりうる課題）について議論し、ゲストへの質問を作成する

2日目（9月26日）

当事者の方々との意見交換

グループワークにて、公共放送で活用される手話 CG 生成技術開発について配慮すべき事項を完成させる

3日目（9月27日）

配慮すべき要件集の共有

公共放送で活用される手話 CG 生成技術開発について配慮すべき事項について、自らの専門分野から貢献できることについての個人ワーク

全体共有



❖ 京都大学の取り組み

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

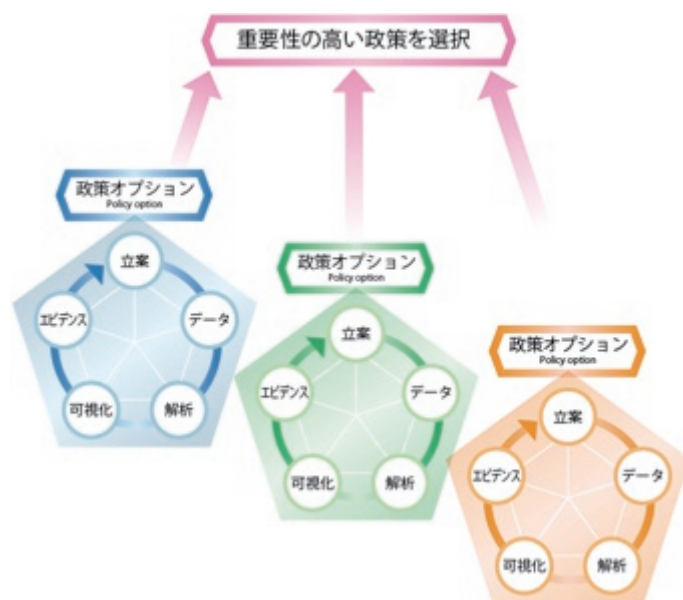


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

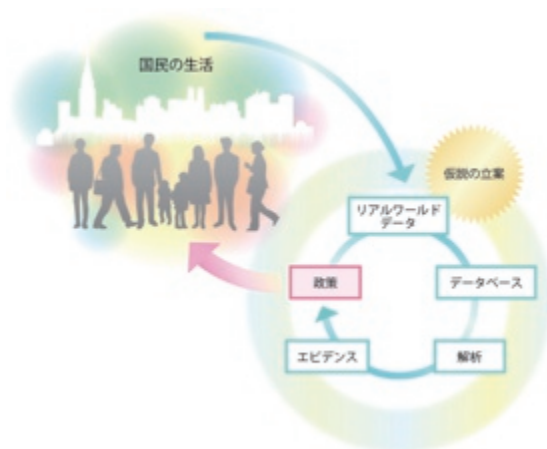


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

2024 年度 在籍者数の合計：9 人

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：4 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 中央省庁：1 人、研究機関：1 人）

*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）
修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）
修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）
修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）
修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：2 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）
修了者数：4 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2019 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、農学研究科：2 人、医学研究科：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 公共政策教育部：3 人、医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、博士課程在学中：2 人）

2021 年度

履修登録者数：3 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、農学研究科：2 人）
修了者数：2 人（進路内訳 マスメディア：1 人、民間企業：1 人）

2022 年度

履修登録者数：2 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、公共政策教育部：1 人）
修了者数：3 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：1 人）

2023 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、公共政策大学院：1 人、情報学研究科：1 人、文学研究科：1 人）
修了者数：2 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人）

学際プログラム履修コース（修了要件 8 単位以上）

2024 年度 在籍者数の合計：9 人

履修登録者数：3 人（所属研究科内訳 生命科学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、公的研究機関：1 人、民間企業：3 人、博士課程進学：1 名）

*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2019 年度

履修登録者数：4 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：2 人、農学研究科：1 人）

修了者数：1 人（進路内訳 博士課程在学中：1 人）

2020 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、情報学研究科：1 人、総合生存学館：1 人、農学研究科 1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、進学：1 人、不明：1 人）

2021 年度

履修登録者数：4 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、農学研究科：1 人、総合生存学館：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 中央省庁：1 人、シンクタンク：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：2 人、一貫制大学院在学中：1 人、博士課程進学：1 人）

2022 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 経営管理教育部：1 人、工学研究科：1 人、公共政策教育部：3 人、人間・環境学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 中央省庁：2 人、公務員：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：1 人、博士課程進学：1 人）

2023 年度

履修登録者数：2 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 公務員：1 人 シンクタンク：1 人、民間企業：2 人）

京都大学「政策のための科学」プログラム 開講科目一覧（2024 年度）

科目カテゴリー	授業科目名	主担当教員（研究科）	単位	学期
入門必修科目	現代社会と科学技術 B	川上 浩司（医学研究科）、他	2	後期
必修科目（※）	科学技術コミュニケーション演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	通年
連携必修科目（※）	研究プロジェクト	川上 浩司（医学研究科）、他	2	通年
選択科目Ⅰ： 基軸科目群(1 科目以上選択)	政策のための研究方法論	カール・ベッカー（政策のための科学ユニット）	2	前期
	現代社会と科学技術 A	川上 浩司（医学研究科）、他	1	前期
	共生社会環境論演習 4A	広井 良典（人と社会の未来研究院）	2	前期
	現代規範理論	森川 輝一（公共政策大学院）	2	前期
	科学技術イノベーション政策特別演習	川上 浩司（医学研究科）、他	1	夏期集中
	科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング	伊勢田 哲治（文学研究科）	2	後期
	共生社会環境論演習 3B	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期
	公共政策論Ⅰ	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2	後期
	共生社会環境論演習 4B	広井 良典（人と社会の未来研究院）	2	後期
選択科目Ⅱ： イシュー科目群 (1 科目以上選択)	経済原論Ⅰ(応用ミクロ経済学)	伊藤 順一（農学研究科）	2	前期
	FinTech 概論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
	デジタルガバメント論	岩下 直行（公共政策大学院）	2	前期
	情報社会論	大手 信人（情報学研究科）	2	前期
	地方税財政の実像	羽生 雄一郎（公共政策大学院）	2	前期
	開発政治学	関山 健（総合生存学館）	2	前期
	科学技術イノベーション政策論Ⅰ	山下 恭範（経済研究所）	2	前期
	疫学Ⅰ(疫学入門)	中山 建夫（医学研究科）	1	前期前半
	文献評価法	中山 建夫（医学研究科）	1	前期後半
	科学技術イノベーション政策総合演習	川上 浩司（医学研究科）、他	2	夏期集中
	健康情報学Ⅰ	中山 建夫（医学研究科）	2	後期
	国際環境政治学	関山 健（総合生存学館）	2	後期
	科学技術イノベーション政策論Ⅱ	山下 恭範（経済研究所）	2	後期
	医薬品の開発と評価	川上 浩司（医学研究科）	1	後期後半
	医薬政策・行政	川上 浩司（医学研究科）	1	後期前半

※ 研究プロジェクトコースのみ必修

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術 A」（前期 木曜 1 限）、「現代社会と科学技術 B」（後期 木曜 4 限）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度より体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2024 年度の「現代社会と科学技術 A」と「現代社会と科学技術 B」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術 A」

第 1 回（2024 年 5 月 16 日） 川上 浩司（京都大学 教授）

健康福祉政策と情報の利活用

第 2 回（2024 年 5 月 23 日） 羽生 雄一郎（京都大学 教授）

超少子高齢社会を支える地方自治

第 3 回（2024 年 5 月 30 日） 関山 健（京都大学 教授）

政策立案の現実と科学：元官僚の社会科学者による考察

第 4 回（2024 年 6 月 6 日） 丹羽 良太（京都大学 准教授）

科学技術・イノベーション政策等について

第 5 回（2024 年 6 月 13 日） 関根 仁博（産業技術総合研究所）

科学技術と社会

第 6 回（2024 年 6 月 15 日） 全教員

12 期生研究課題発表会

第 7 回（2024 年 6 月 20 日） カール・ベッカー（京都大学 特任教授）

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 8 回（2024 年 6 月 27 日） 加藤 和人（大阪大学 教授）

ライフサイエンスの倫理とガバナンス

第 9 回（2024 年 7 月 4 日） 要藤 正任（京都産業大学 教授）

まちづくり・地域づくりとソーシャル・キャピタル

第 10 回（2024 年 7 月 11 日） 岩下 直行（京都大学 教授）

ビットコインにおける非中央集権の理想と現実

第11回（2024年7月18日） 全教員

研究プロジェクト中間発表会

第12回（2024年7月25日） 山下 恭範（京都大学 准教授）

福島のパ償と復興

「現代社会と科学技術 B」

第1回（2024年10月3日） 小山田 耕二（大阪成蹊大学 教授）

データ可視化と政策立案

第2回（2024年10月10日） 全教員

研究プロジェクト中間発表会

第3回（2024年10月17日） 佐野 亘（京都大学 教授）

公共政策と民主主義

第4回（2024年10月24日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）

責任ある研究・イノベーションとは何か

第5回（2024年10月31日） 伊勢田 哲治（京都大学 准教授）

クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会

第6回（2024年11月7日） 大手 信人（京都大学 教授）

森林の生態系サービスと政策

第7回（2024年11月14日） 広井 良典（京都大学 教授）

持続可能性と人口減少社会のデザイン

第8回（2024年11月21日） 依田 高典（京都大学 教授）

データサイエンスの経済学

第9回（2024年11月28日） 伊藤 順一（京都大学 教授）

日本型直接支払制度の政策評価とその方法

第10回（2024年12月5日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）

移植医療の社会的価値

第11回・第12回（2024年12月12日） 富田 直秀（京都大学 名誉教授）

質の評価：アートの視点から

第13回（2024年12月19日） 中山 健夫（京都大学 教授）

医療の経済評価：その現状と課題

第14回（2025年1月9日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）

振り返りワークショップ

❖ 合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」(集中講義 [夏])

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つである SciREX サマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしてきました。この事前ワークショップは京都大学と一緒に実施しています。

事前ワークショップは、9月3日（火）10:30~16:00 の日程で大阪大学と京都大学合同で実施しました。事前ワークショップの講師は、アトリエ・カプリスの岩田 直樹さんと岩田 花奈さんにお願ひしました。サマーキャンプ本番でより良い対話や活動ができるようになることが目的です。今年度は「コワーキングスペースを作る（デザインする）」というテーマでグループワークを行いました。4~5人のグループごとに話し合ってコンセプトデザインを考え、会場内にある備品を活用してスペースを作ってみました。グループごとに目指したことや工夫した点などを発表した後で、他のグループの考えたスペースを使ってみて、その感想や改善のアイデアなどをシェアしました。そこで出された意見などを通して、対話の場作りについて考えを深めました。



その後、9月13日（金）からサマーキャンプに参加しました。9月13日から15日にかけてのサマーキャンプは政策研究大学院大学で開催され、大阪大学からは学生11人と教職員3人、京都大学からは学生8人と教職員4人、実行委員1名が参加しました。



サマーキャンプのプログラムに関しては、「SciREX 事業への参画（本冊子 45 ページ以降）」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」(通年)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術にかかわる現代の社会的課題の解決に資する研究テーマを各自が設定して、人文学・社会科学的な手法を用いた調査および分析を行います。12 月には、京都大学と合同で、研究成果合同発表会も開催します。

授業では、そのための基礎文献の紹介や研究の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、口頭発表会を実施しました。2024 年度の合同発表会は、2024 年 12 月 7 日に大阪大学中之島センターにて、大阪大学 6 人と京都大学 2 人の合計 8 人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2024 年度(口頭発表会：2024 年 12 月 7 日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 芸術作品から見た生業の崩壊と再生
- (2) 二次医療圏における医療情報連携の実態と包括的連携の課題
- (3) HPV ワクチンの男性接種を巡る日本とフランスの国会議事録のフレーム分析
- (4) 新聞記事に見るマスメディアの量子技術に対する焦点の変遷
- (5) 博士人材のキャリアパス多様化を考える
- (6) 異なる専攻に所属する大学院生の生成 AI をめぐるディスコース分析

京都大学

- (1) 市町村産後ケア事業の実施状況と地域間格差の要因検討—ホームページデータを用いた探索的研究—
- (2) 労働世代がん生存者におけるがん診断後の離職状況と離職関連因子の検討

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013 年度(口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて)

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム—「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

2014 年度(口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編—エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション—人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査—先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察—NL マークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」—福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件—習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR—企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 —社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 —医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—

- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床一応用への実現に関する調査研究一
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定一選択型実験による接近一
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化一レセプトデータベースを用いた疫学的研究一

2015 年度（口頭発表会：2016 年 2 月 13 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望一大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として一
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化一科学技術社会論と古典的自由主義の融合一
- (3) 日本における核融合研究と政策一歴史、現状、そして今後に向けて一
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて一DNA 型証拠と足利裁判一
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査一大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認一

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析一大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える一
- (2) 問題解決における現場地の重要性一自転車シェア事業を手掛かりに一
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望一新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に一
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016 年度（口頭発表会：2016 年 12 月 10 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準一若手研究者に対する探索的調査一
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争一日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて一
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について一物理分野を中心に一
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察一ユーザー参加の視点から一
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較一過去の河川計画を例として一
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方一偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」一

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策一奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に一
- (4) 自治体議員の研修に関する考察一評価グリッド法を用いた分析一
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017 年度（口頭発表会：2017 年 12 月 9 日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因一文献調査とインタビュー調査による探索的研究一
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討一因果関係の判定条件と規範的・価値的含意一
- (4) 離人形及び離人形業界における「価値体系」の整理一現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて一
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査一サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について一

京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化一韓国の全国紙の社説を中心に一
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析一大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討一
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査一福島第一原子力発電所事故を例に一
- (4) 地域公共交通改革の事例分析一地域の持続的な移動手段確保に向けて一
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究一健康保険証発行に併せた一斉通知の実現可能性を探る一

2018 年度（口頭発表会：2018 年 12 月 8 日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 大学におけるデュアルユース研究一「対話ツール」を利用した学生との議論一
- (2) “個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査一兵庫県を事例として一

京都大学

- (1) 指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴—文献検索数を用いた記述研究—
- (2) 福祉政策による社会環境変化と精神障害者の QOL との関連—統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究—
- (3) 塩酸リトドリンの早産予防効果—データベースを用いた検討—
- (4) 市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討—サイエンスカフェの事例分析から—

2019 年度（口頭発表会：2019 年 12 月 14 日 京都大学芝蘭会館別館にて）

大阪大学

- (1) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討—革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）を題材として—
- (2) 生命倫理への関心度の決定要因—情報収集行動を中心に—
- (3) 博士課程進学を選択する要因の調査—大阪大学大学院生命機能研究科における事例から—
- (4) 原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響—大阪大学大学院工学研究科を対象として—

京都大学

- (1) 京都市営バス路線ネットワークの最適化
- (2) 農業輸出における行政の役割と課題

2020 年度（口頭発表会：2020 年 12 月 12 日 オンラインにて）

大阪大学

- (1) 日本のスマートシティ関連事業における府省庁連携—中央府省庁と地方自治体の視点から—
- (2) 高度教養教育に関する学習動機分析—大阪大学高度副プログラムにおける調査から—
- (3) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程—戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)を事例として—
- (4) プラスチック資源循環の実現に向けた課題の検討—レジ袋有料化を事例として—
- (5) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)における台湾政府と市民の科学コミュニケーション—記者会見のインターネットライブ中継に伴う課題—
- (6) 科学に関する市民参加の課題と、その解決に向けた実践形態の模索—大阪 NO₂—斉測定運動を事例として—
- (7) 要介護・要支援認定における医学的評価の在り方—主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析—

京都大学

- (1) 外国人介護人材向けの介護のテキストの量的分析—介護現場での円滑なコミュニケーションを目指して—
- (2) 日本における女性の出産施設選択の嗜好—システムティックレビュー—
- (3) 多職種連携@精神科—質向上サイクルワーク—
- (4) 「見守り活動」への学生参加を増やせるか?—京都市と草津市の事例を対象に—
- (5) 農業大学校における環境保全型農業の実践についての提案—SDGs の達成を目指して—

2021 年度（口頭発表会：2021 年 12 月 4 日 オンラインにて）

大阪大学

- (1) 環境除染目的の日用品に対する日本のガバナンスの特徴と課題—除菌を騙る製品はなぜ流通するのか—
- (2) スタートアップ・エコシステム拠点形成における大学の役割—大阪大学の取り組みを例に—
- (3) 宇宙科学・探査プロジェクトの政策過程—深宇宙探査技術実証機 Destiny+計画を例に—
- (4) 中等教育の場で理科教員が教える地学の現状と支援に向けた提案
- (5) 化学系研究室における学生の学習過程の調査—正統的周辺参加論の枠組みから—

京都大学

- (1) 日本における都市部高齢者の Aging in Place 実現に向けたボランティア活動奨励制度の検討
- (2) 日本の自粛政策の経済的コストと損失余命
- (3) 日本企業に就職した元留学生の直面する日本語コミュニケーション上の問題—中国人留学生を対象に—
- (4) 鉄道における時間帯別運賃政策の国際比較研究—日本版時間帯別運賃政策に向けて—

2022 年度（口頭発表会：2022 年 12 月 3 日 大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

- (1) 日本の理系女性研究者の増加を推進する政策—女子中高生の理系進路選択に関する取り組みに注目して—
- (2) 日本における博士後期課程学生への公的経済支援制度の史的変遷—日本学術振興会特別 研究員制度は失敗だったのか?—

京都大学

- (1) 林業大学校の現状と課題に基づく学生募集活動の提案—インターネット・SNS、オープンキャンパス、高校訪問に焦点を当てた分析—
- (2) 官民イノベーションプログラムの目的と実際の投資状況
- (3) 日本のパーム油依存を減らすための政策案

2023 年度（口頭発表会：2023 年 12 月 2 日 京都リサーチパークにて）

大阪大学

- (1) チリにおける脳神経関連権（neurorights）に関する憲法改正の背景
- (2) 日本の博物館におけるデジタル・アーカイブ化が抱える課題—学芸員へのインタビュー調査を通じて—

- (3) パーソナルデータ提供に関する課題検討—同意の必要性を問い直す—
- (4) 地域に即した陸上風力発電ゾーニングのための住民を巻き込んだ合意形成プロセスの検討
- (5) 海洋教育トランプの開発：海洋政策に関わる人材の育成に向けて
- (6) 新学習指導要領における統計の現状と数社横断的な授業の可能性の調査
- (7) 災害復興における行政の役割とその限界—岩手県沿岸部における防潮堤建設を事例に—

京都大学

- (1) 自治体によるレスパイト利用としての一時預かり活用促進

「研究プロジェクト」の発展

「研究プロジェクト」で取り組んだ内容をもとに学術論文として発表する取り組みも行われています。今年度は下記の 1 件が学術誌に掲載されました。

西川晃弘. 2024. 「科学的な市民調査の仕組みとその変遷：大阪 NO₂一斉測定運動を事例に」, 『Co*Design NOTE』, 3: 1-24, 2024 年 5 月.

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術 B」において、大阪大学の平川秀幸教授が、入門必修科目「現代社会と科学技術 A」において、加藤和人教授が講師を務めました。

また、京都大学の祐野特定講師と小泉特定助教が、大阪大学で実施される「科学技術イノベーション政策総合演習」事前ワークショップに参加しました。

🍷 阪大学生の声

複眼的な思考を鍛え科学技術の進路を洞察する

小早川 なのさん（理学研究科 化学専攻 博士前期課程 1 年）

幼い頃から実験が好きで、中学からサイエンス研究会に所属し、高校では大阪大学の高大接続プログラム（SEEDS）で学びました。現在は、SEEDS でお世話になった研究室で、物質の表面に作った分子膜の研究をしています。学部生の頃から興味があり、副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策（STiPS）」を履修しました。

合宿形式で他大学の学生と議論を重ねる「科学技術イノベーション政策総合演習」では、大型の研究開発プロジェクトに政策提言をするグループに参加。ファンディング側にいる人たちの予算配分に関する考え方や、社会課題の選び方など、自分にはない視点で物事を考えることができました。

3 日間にわたる集中講義「科学技術コミュニケーション演習」では、聴覚に障がいのある方への放送技術開発の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)について考えました。手話 CG の技術開発という身近にはないテーマに、なかなか考えがまとまりませんでしたが、当事者からの話題提供や、自由に発言できる授業の雰囲気のおかげで、さまざまなアイデアが出せるようになりました。

研究が好きなので進学と悩んでいましたが、自分の研究は社会で活かせるのか知りたいとの思いが強くなり、就職活動することに決めました。授業で出会った社会人博士の姿も大きな励みになっています。



❖ 京大学生の声

多くの繋がりやきっかけを得られた場所

池田 有梨奈さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 専門職学位課程 2年）



私は、ぼんやりと EBPM に関心があったこと、これまで医療一辺倒だった自分を変えたいと思ったことから、様々な分野から政策について学ぶことができる STiPS に参加しました。

コース履修の中で、これまで触れる機会の無かった科学技術政策や倫理研究等のトピックスを学び、様々な分野の学生と意見交換ができたことにより、視野がぐんと広がりました。同時に、そのような他分野の方に自分の課題意識や研究過程を説明し、理解を得ることの難しさと大切さを痛感できた2年間でした。特に、STiPSの研究プロジェクトの中で、専攻での学術研究のステップや説明方法との違いに戸惑うこともありました。しかし、他分野を含めた多くの人に、研究の意義を伝え、協力していく必要性や、研究結果の実装・評価の必要性を学ぶ良い機会になり、自身の専攻での研究でも「研究のその先」を意識するようになりました。

STiPS での経験から、研究結果を活用した医療政策の策定に携わりたいと思い、修了後は行政官となる事にしました。一医療者であった自身が、行政官になりたいと思い、実際に就職できたのは、STiPS で様々な分野の先生方・仲間と沢山議論する中で課題意識を持つ姿勢が身についたからであると思います。STiPS が謳っている「つなぐ」人材になれるよう、今後もここでの学びや繋がりを大切にしていきたいです。

STiPS を通して学ぶ政策を超えた議論の力

寺杣 美里さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 専門職学位課程 2年）

STiPS プログラムは、異なるバックグラウンドを持つ他者・ステークホルダーと対話し、合意形成を目指すための柔軟な姿勢と堅牢なロジックの建て方の両輪を学ぶ場だと感じました。その観点で特に印象的だったのはサマーキャンププログラムです。国内外各地から集まった多様な学術分野を専門とする参加者と共に政策課題に取り組みました。参加者それぞれの考え方が異なる中で、限られた時間内で議論を進める難しさを感じましたが、実際の省庁の方々からのアドバイスを受け、説得材料の効果的な揃え方や、合意形成をリードするプロセスを学ぶことができました。この経験を通じて、他者の意見を尊重しつつ納得度の高い議論を行うためのエッセンスに触れることができたのは貴重な体験です。

また、このプログラムを通じて、他の分野の同期生のつながりを築けたことも大きな財産です。院生は学部生と異なり、自身の専門領域に閉じこもりがちですが、同期生との対話を通して異なる視点を知ること、自身の専門分野での研究をより深めたり、キャリアを考える上での多くの示唆を得たりすることができました。STiPS は「政策」に限らず、広く社会とのつながりを考えるすべての人にとって有意義なプログラムだと感じています。



地に足をつけて羽ばたくために

久保 健太さん（人間・環境学研究科 人間・環境学専攻 博士前期課程 2年）



私の専門は哲学・倫理学で、その中でも特に環境問題について思想的に解剖し、新たな自然観を模索する研究を行っています。STiPSでは自分の研究に取り組む時間も確保するため、学際プログラム履修コースを選択しました。

私の代には医学や公共政策を専門とする学生が多く、文献研究を中心としていた私は、政策学や経済学の知識が要求される講義で肩身の狭い思いをすることもありました。私が本領(?)を発揮できたのは、講義後に設けられたディスカッションの時間です。私のような門外漢にとってはこの時間が最も刺激的で、研究のヒントを得る貴重な機会になりました。たとえば私は、環境問題のような地球規模の課題に対処するためには、現代の「価値相対主義」では不十分であり、それに代わる「相対的でない」価値が必要だと考えています。独りで文献と向き合っていると、自分の研究の方向性について漠然とした不安に襲われることがあります。STiPSで他分野の学生とディスカッションをする中で、医療や政策立案といった場面で「新しい価値」が切実に求められていることに気づき、「自分の研究は必要なんだ！」という実感を得ることができました。

STiPSには、他分野に関心があるだけでなく、「社会をより良くしたい」と本気で考える学生と、それを本気で応援してくれる先生方が集まってきます。その熱量を肌で感じられたことは、私にとってとても貴重な経験になりました。

🍷 STiPS 修了生ネットワーキング

STiPS 修了生と現役生との交流会（大阪大学）

2024 年 5 月 15 日（水）18 時 30 分から、現役生と修了生の交流会を開催しました。CO デザインスタジオで実施し、STiPS 関連教員も参加して 24 人が集い、近況などを語り合いました。



研究プロジェクト進捗報告会（京都大学）

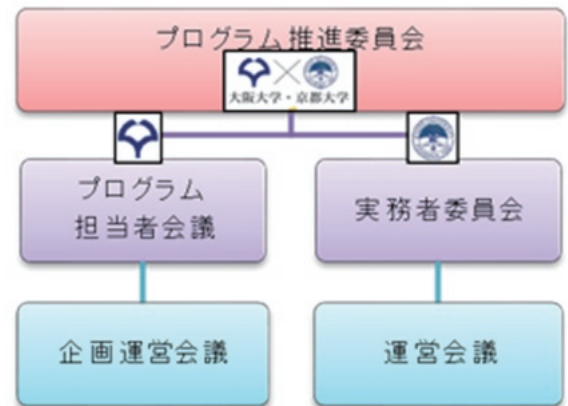
2024 年 6 月 15 日（土）10 時より、京都大学の 12 期生の研究プロジェクト研究テーマ発表会・OB・OG 交流会を実施しました。Zoom を活用したオンライン形式での実施により、四国や東北地方に在住する修了生が参加し、現役生の研究プロジェクトにコメントを寄せてくれました。進捗報告会終了後の懇親会では、ブレイクアウトルームに分かれて、修了生の近況報告や現役生との交流を行いました。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。

2024 年度は計 3 回（6 月 12 日、10 月 9 日、2 月 19 日）実施しました。同会議では、両大学における教育研究プログラムの進捗状況などを共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプなどの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主に CO デザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置していました。

カリキュラムの調整

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 21、うち新設科目数は 7 でしたが、2014 年度の開講科目数は 30、うち新たに追加した科目数は 9 となりました。2015 年度の開講科目数は 29、2016 年度の開講科目数は 32 でした。2017 年度には、4 学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は 36 になり、2018 年度の開講科目数は 37、2019 年度の開講科目数は 40、2020 年度の開講科目数は 40、2021 年度の開講科目数は 39、2022 年度の開講科目数は 35、2023 年度の開講科目数は 35、2024 年度の開講科目数は 32 でした。

京都大学では、本プログラム開始の 2013 年度の開講科目数は 22、うち新設科目数は 5 でしたが、2014 年度の開講科目数は 1 科目追加し 23 科目となり、2015 年度の開講科目数は 23、2016 年度の開講科目数は 25、2017 年度の開講科目数は 23、2018 年度の開講科目数は 27、そして、2019 年度の開講科目数は 28、2020 年度の開講科目数は 30、2021 年度の開講科目数は 27、2022 年度の開講科目数は 28、2023 年度の開講科目数は 26、そして 2024 年度の開講科目数は 27、でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件 14 単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014 年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しています。これは、2013 年 3 月 27 日に両大学の総長名で締結された「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013 年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっていきます。

研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）

- 【第 112 回 STiPS Handai 研究会】
市民による商品テストの歴史ー『暮らしの手帖』を例に
- 開催日：2024 年 7 月 25 日
- 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

- 【第 113 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）第 1 回
三菱電機株式会社 統合デザイン研究所 深川浩史さん
- 開催日：2024 年 12 月 10 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
* 授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- 【第 114 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）第 2 回
早稲田大学 リサーチイノベーションセンター 喜久里要さん
- 開催日：2024 年 12 月 17 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
* 授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- 【第 115 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）第 3 回
大阪大学 大学院法学研究科 山田綾子さん
- 開催日：2024 年 12 月 24 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
* 授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。

- 【第 116 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）第 4 回
大阪大学 ELSI センター／NEC 田中孝宣さん
- 開催日：2025 年 1 月 7 日

- 実施形態／場所：オンライン形式
 - 主催：STiPS
 - 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
 - * 授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。
-
- **【第 117 回 STiPS Handai 研究会】つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）第 5 回**
大阪大学 ELSI センター 工藤郁子さん
 - 開催日：2025 年 1 月 14 日
 - 実施形態／場所：オンライン形式
 - 主催：STiPS
 - 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター
 - * 授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催。
-
- **【第 118 回 STiPS Handai 研究会】**
放送のプロフェッショナルと社会を考える（2024 年度）
 - 開催日：2024 年 11 月 5 日
 - 実施形態／場所：NHK 大阪放送局
 - 主催：STiPS
 - 共催：大阪大学 CO デザインセンター
-
- **【第 119 回 STiPS Handai 研究会】**
生態学における市民科学の実践：鶴の市民調査を例に
 - 開催日：2025 年 3 月 13 日
 - 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
 - 主催：STiPS
 - 共催：大阪大学 CO デザインセンター

「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発

- **ワークショップ「気候市民会議の多様な開催を考える・その 3」**
 - 開催日：2024 年 4 月 19 日
 - 実施形態／場所：大阪大学中之島センター 5 階
 - 主催：大阪大学 CO デザインセンター、環境省近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）
 - 共催：STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター
 - * 科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。
-
- **「未来のまちづくりワークショップ：大阪いばらき気候市民会議 2024」@おにクル**
 - 開催日：2024 年 12 月 15 日

- 実施形態／場所：茨木市文化・子育て複合施設 おにクル 7 階会議室 1
- 主催：大阪いばらき気候市民会議実行委員会
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター・京都女子大学諏訪研究室
- 協力：STiPS

* 科研費基盤研究 (B) 『『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発』(JP 23H01020) の一環として実施

サイエンスカフェ@千里公民館

- サイエンスカフェ@千里公民館「世代をつなぐ細胞の研究と未来」
- 開催日：2024 年 6 月 15 日
- 実施形態／場所：千里公民館 集会場（千里文化センター「コラボ」2 階）
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：STiPS、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学社会技術共創研究センター

多層的小規模対話：サーキュラーエコノミーに関する研究開発領域検討のためのオンラインワークショップ（共進化実現プログラム第Ⅲフェーズの一環として開催）

- 市民向けワークショップ「生活者から見たサーキュラーエコノミー」
- 開催日：2024 年 12 月 14 日（午前）
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発」
- 市民向けワークショップ「生活者から見たサーキュラーエコノミー」
- 開催日：2024 年 12 月 14 日（午後）
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発」
- 専門家ワークショップ「俯瞰的専門家から見たサーキュラーエコノミー」
- 開催日：2024 年 12 月 21 日
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発」
- 専門家ワークショップ「俯瞰的専門家から見たサーキュラーエコノミー」
- 開催日：2024 年 12 月 28 日

- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催：SciREX 共進化実現プログラム「ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発」

その他

- 学際教育研究会「宇宙×倫理学をどう教えるのか」
- 日時：2024 年 6 月 13 日
- 実施形態／場所：大阪大学吹田キャンパス 産学共創 C 棟 4 階 セミナー室 2
- 主催：大阪大学 CO デザインセンター
- 共催：大阪大学 学際大学院機構、STiPS、超域イノベーション博士課程プログラム

● どうなる！？未来の学校！！2024（「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2024」内ブース）

- 開催日：2024 年 6 月 29 日
- 実施形態／場所：ららぽーと EXPOCITY 1F 光の広場
- 主催：大阪大学
- 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター（若林 魁人・水町 衣里）
- 協力：STiPS

* JST/RISTEX「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム」研究開発プロジェクト「教育データ利活用 EdTech（エドテック）の ELSI 対応方策の確立と RRI 実践」（代表者：加納圭）の一環として実施。

● 科学コミュニケーション研究会 臨時研究会「科学の信頼」

- 日時：2025 年 1 月 13 日
- 実施形態／場所：オンライン開催
- 主催：科学コミュニケーション研究会
- 協力：STiPS
- 後援：科学技術社会論学会、一般社団法人 日本サイエンスコミュニケーション協会

● ELSI Forum 2024「ワークプレイスのための『社会技術』：働く場に持ち込まれる新規技術とその ELSI」

- 日時：2025 年 1 月 24 日
- 実施形態／場所：大阪大学中之島センター 5 階
- 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター
- 協力：大阪大学 CO デザインセンター
- 後援：STiPS

3. SciREX 事業への参画

3. SciREX 事業への参画

サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2024 年度

実施日：2024 年 9 月 13 日から 15 日

会場：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 11 人と教職員 3 人、京都大学からは学生 8 人と教職員 4 人、実行委員 1 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013 年度

実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度

実施日：2014 年 8 月 31 日から 9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度

実施日：2015 年 8 月 21 日から 8 月 23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度

実施日：2016 年 9 月 15 日から 17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

2017 年度

実施日：2017 年 8 月 20 日から 22 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 5 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人

2018 年度

実施日：2018 年 8 月 28 日から 30 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 4 人、京都大学からは学生 4 人と教員 5 人

2019 年度

実施日：2019 年 8 月 26 日から 28 日（事前ワークショップは、8 月 9 日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生 14 人と教員 5 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2020 年度（中止）

予定されていた実施日：2020 年 9 月 17 日から 19 日

予定されていた会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

主催拠点：政策研究大学院大学、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2021 年度

実施日：2021 年 9 月 3 日から 5 日

会場：オンライン開催

主催拠点：政策研究大学院大学、一橋大学

参加者数：大阪大学からは学生 6 人と教員 6 人、京都大学からは学生 8 人と教員 3 人

2022 年度

実施日：2022 年 9 月 2 日から 4 日

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学、九州大学

参加者数：大阪大学からは学生 9 人と教職員 3 人、実行委員 1 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人、実行委員 2 人

2023 年度

実施日：2023 年 9 月 8 日から 10 日

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学、九州大学

参加者数：大阪大学からは学生 9 人と教職員 3 人、実行委員 1 人、京都大学からは学生 6 人と教員 3 人、実行委員 2 人

2024 年度の体制

主催：文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課 政策科学推進室、SciREX 基盤的研究・人材育成拠点

企画・運営：SciREX サマーキャンプ 2024 実行委員会、政策研究大学院大学 SciREX センター

2024 年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「私たちはどう生きるか？～科学技術イノベーション×政策×アントレプレナーシップ～」

地球沸騰ともいわれ始めた地球温暖化の深刻化、覇権主義国家と民主主義国家の対立、各国の社会における分断の先鋭化など、今日の世界は多くの課題を抱えている。また、わが国では、地震や気象災害等の不確実な事象が続くとともに、確実に迫りくる人口減社会は多くの課題を提起するが、その社会を私たちは生きていくことになる。

科学技術の成果を生かしたイノベーションは、これまで健康で豊かな生活の実現に貢献してきた。同時に、様々な課題への対応にあたり科学技術の果たす役割も大きい。例えば、地球温暖化への対応にあたっても再生可能エネルギーの活用をはじめとするグリーンイノベーションへの期待は大きい。AI や量子技術などの高度な科学技術の発展は、社会に新しい可能性をもたらすと同時に、これまでになかった新たな課題を提起する。

一方で、時代変化が激しく課題が山積する中、科学技術の成果を享受し、その否定的な影響を低減するため、政策の果たす役割も大きい。より良い政策の企画立案と実施は、人々の豊かで安寧な生活の実現に大きく影響する。ここで求められているのは、私たちの将来のあるべき姿、生き方を共有し、それに向けた政策をエビデンスに基づき設計し、実践していくことである。

このような時代において未来を切り拓くために挑戦する能力も必要になっており、アントレプレナーシップに期待される役割も大きい。科学技術の進展によってそれを発揮する場面やその態様も変化してきている。アントレプレナーシップには、トライアルアンドエラーのマインドとクリティカルシンキングの能力が必要不可欠であり、サイエンスの手法に親和性がある。

こうした背景を踏まえ、本サマーキャンプでは、複雑な課題にアントレプレナー的思考で取り組み、さらに多様性を考慮して政策を考える。グループワークでは、多様なバックグラウンドを持った参加者が協働して、政策課題についてエビデンスに基づく具体的な政策提言にとりまとめ、さらに、それらを政策担当者・実務家に向けて提案する過程を経験する。

学習のねらい（プログラムより）

- ・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、「政策のための科学」の意義や多様性に関する認識を深める。
- ・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学ぶ。
- ・テーマごとに、政策担当者や実務家へのヒアリング等を行い、エビデンスに基づいた具体的な政策提言の構築を実践的に行う。



サマーキャンプのプログラム

事前学習会

2024 年 8 月 21 日（水）17:30～21:10

「科学技術イノベーションの測定・評価」

富澤 宏之 先生（文部科学省科学技術・学術政策研究所 客員総括主任研究官）

「STI 政策の概念とそのガバナンスについて」

城山 英明 先生（東京大学公共政策大学院 大学院法学政治学研究科 教授）

「政策起業とアントレプレナーシップ」

馬田 隆明 先生（東京大学 産学共創推進本部 FoundX ディレクター）

	9 月 13 日（金）	9 月 14 日（土）	9 月 15 日（日）
午前		9:00-12:10 グループワーク	10:00-12:25 最終発表会
午後	13:00-13:50 オリエンテーション 14:00-17:45 グループワーク	13:00-13:50 中間発表会 14:00-15:20 グループワーク 15:30-16:30 相談会・ 16:40-18:00 グループワーク	13:15-14:15 最終発表会（続き） 15:15-16:15 フィードバック・全体講評 16:15-16:30 閉会挨拶

グループワーク（プログラムより）

J1 STI 政策における EBPM とデータ解析

メンター：ソン・ジュンウ（九州大学）

J2 イノベーションエコシステム（社会実装・産学連携）を推進する人材育成①

メンター：李佳蓉（一橋大学）

J3 イノベーションエコシステム（社会実装・産学連携）を推進する人材育成②

メンター：高橋和宏（一橋大学）

J4アントレプレナーシップと STEAM 教育

メンター：祐野恵（京都大学）

J5 課題解決に向けたスマートシティの社会実装

メンター：松村悠子、武田浩平（大阪大学）

J6 エネルギー政策の国際比較と次世代エネルギー

メンター：高橋一彰（政策研究大学院大学）

J7 研究開発・社会実装を強化する大型プロジェクトの立案

メンター：隅蔵康一（政策研究大学院大学）

J8 障がい者・高齢者の社会的包摂

メンター：小泉志保（京都大学）

J9 生成 AI とクリエイターの共存

メンター：隅蔵康一（政策研究大学院大学）

E1 Entrepreneurship and STEAM education

Mentor : Carl Becker (Kyoto University)

E2 Smart City Project: a solution for sustainable development

Mentor : Koji Kimita (Tokyo University)

E3 Supply chain diversity to address geopolitical risks

Mentor : Michael Huang (GRIPS)

他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が、2024年7月15日、GRIPSで実施される授業「科学技術イノベーション政策概論」の1回分を担当しました。また、2024年10月12日には、九州大学で実施される「科学技術社会論概説」、2024年10月24日には、京都大学で実施される「現代社会と科学技術B」の1回分を担当しました。また、大阪大学の加藤和人教授が2024年6月27日に京都大学で実施される「現代社会と科学技術A」の1回分を担当しました。2024年9月3日には、京都大学の祐野特定講師と小泉特定助教が、大阪大学で実施される「科学技術イノベーション政策総合演習」事前ワークショップに参加しました。

研修などへの講師派遣

2025年1月20日に文部科学省・SciREX ブラウンバックセミナーにおいて、京都大学の祐野恵特定講師が「科学技術政策における博士人材の活用に関する分析－行政官の意識調査を用いて－」と題する話題提供を行いました。

2024年12月に行われた科学技術イノベーション政策に関する行政官研修には、17日に京都大学の祐野恵特定講師が、20日には大阪大学の平川秀幸教授が講師として参加し、科学技術イノベーションと社会、ガバナンスについての講演と議論を行いました。

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様なテーマで研究会やワークショップなどを実施してきました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2024 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発

本研究では、日本でも自治体において実践がはじまりつつある気候市民会議の設計やムーブメントを下敷きとして、科学教育での蓄積を念頭に置きつつ、主に高校教育における「公共」への転用の可能性を模索し、科学教育の可能性の拡張を目指しています。その上で、民主主義に基づいた脱炭素社会への移行に資する教育プログラムを開発すること、これが本研究の目的です。このようなプログラム開発をふまえ、脱炭素社会への転換に資する形で、気候市民会議を中心とした参加や熟議のしくみを活用する方法を提案することにより、社会的波及効果として、地方自治体の環境教育や脱炭素に向けた取り組みに知見を還元することも目指します。2024 年度は下記のワークショップを行いました。

ワークショップ「気候市民会議の多様な開催を考える・その3」

- タイトル：ワークショップ「気候市民会議の多様な開催を考える・その3」
- 日時：2024 年 4 月 19 日（金）14:00～17:00
- 実施形態／場所：大阪大学中之島センター5 階
- 主催：大阪大学 CO デザインセンター、環境省近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）
- 共催：STiPS、大阪大学社会技術共創研究センター、環境省 近畿地方環境事務所

※本ワークショップは、科研費基盤研究（B）『「科学・公民」教育としての気候市民会議プログラムの開発』（JP 23H01020）の一環として実施。

気候市民会議とは、社会全体の縮図を構成するように一般から無作為で選出された人たちが、専門家からバランスの取れた情報提供を受けながら、数週間から数か月かけて気候変動対策について議論する市民会議です。

2019 年から欧州各国で行われるようになり、日本でも 2020 年に札幌で初めて試行された後、各地で実施が相次いでいます。しかしその開催は関東圏が中心であり、関西での開催実績や具体的な計画は見られません。

第 3 回目となる今回は、これまでの一般的な話から個別の構想や企画、実践に論点を移し、より少人数で話し合う場となりました。

事例報告では、一市民として自治体内での開催を検討している例、複数の事業を抱えるグループ企業内での展開、里山に位置する高校における生徒たちの環境課外活動、地域の NPO 法人における子育て世代を対象にした気候変動問題を考えるイベントの企画、といった、自身が属する様々なコミュニティ内での取組について発表と共有がなされました。

それぞれの報告に対し、参加者から、先行事例に基づく経験や既存のツール、連携先などの情報共有があり、休憩時間には、今後の活動や展開にむけたフリーディスカッションが活発に行われていました。休憩をはさみ、4つの事例報告と全体を通じて、全員でのディスカッションを行いました。

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2024/001246.html>) に開催レポートを掲載しています。

未来のまちづくりワークショップ：大阪いばらき気候市民会議 2024

- タイトル：「未来のまちづくりワークショップ：大阪いばらき気候市民会議 2024」
- 日時：2024 年 12 月 15 日（日）12:00～17:00
- 実施形態／場所：茨木市文化・子育て複合施設 おにクル 7 階会議室 1
- 主催：大阪いばらき気候市民会議実行委員会
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、京都女子大学諏訪研究室
- 協力：STiPS

※本ワークショップは、科研費基盤研究（B）「『科学・公民』教育としての気候市民会議プログラムの開発」（JP 23H01020）の一環として実施。

今回の会議は、大阪府茨木市での気候市民会議の本格的な実施を目指して、茨木市民有志を中心とした実行委員会が、お試し企画として主催したものです。自分たちが住むまちの中でそれぞれができる行動、社会や行政で必要な取組などを半日かけて話し合いました。

通常は複数回にわたって個別のテーマを話し合う形を、半日にまとめたコンパクト版の気候市民会議でしたが、どのテーブルからも茨木市の特性を活かし、かつ身近に取り組める内容や、行政に支援してほしいポイントなど、様々なアイデアが発表されました。

最後に、会議後の流れやその報告会等についてアナウンスがあり、また参加者に向けて、様々な気候市民会議の展開が呼びかけられました。

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001263.html>) に開催レポートを掲載しています。

5. 共進化実現プログラムの実施

5. 共進化実現プログラムの実施

2023 年度からは「共進化実現プログラム（第Ⅲフェーズ）」が始まりました。政策担当者と研究者とが対話をしながら研究課題を設定し、共に研究を進めるというものです。このうち2件に、STiPS 参画教員が関わっています。

ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発

研究課題名

ミッション誘発型の STI 政策及び研究開発戦略の検討プロセスの客観的な手法開発

プロジェクト期間

2023（R5）年 10 月～

プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・木見田 康治（東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻 特任講師）

行政担当部署

文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課、文部科学省科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室

取り組む課題

ミッション誘発的な新興・融合領域の戦略策定を促進するために、「注目すべき新興・融合研究領域の決定プロセスのメソッド化」を行い、決定の属人的バイアスを最小化し、決定内容の堅固さと包摂性、行政実務での実行可能性を保証するようなエビデンスの生成手法を確立すること。また、そのために、文部科学省内の分野所掌課、研究助成機関等との連携・共進化関係を構築すること。

プロジェクト概要

ミッション誘発型の新興・融合研究領域の決定プロセスにおいて広く利用可能で、決定における属人的バイアスが生じる可能性を最小化できるような、説明可能性・検証可能性・包摂性を備えた客観的エビデンスを生成するための大規模データ分析および超学際的エンゲージメントの手法を開発する。手法の開発とその効果の評価・検証を、文部科学省内の分野所掌課、研究助成機関等との連携・共進化の関係のもとで行う。

2024 年度の主たる研究成果

「サーキュラーエコノミー」を事例研究対象として、超学際エンゲージメントの対話プロセスの開発のために、サーキュラーエコノミーに関するワークショップを一般市民・俯瞰的専門家・領域専門家それぞれを対象として開催するとともに、その結果をもとに、オンラインアンケート調査をサーキュラーエコノミー分野の研究者と多様な研究者の集団から無作為抽出した研究者それぞれに対して実施した。

科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究

研究課題名

科学技術政策における博士号を保有する人材活用に関する調査研究

プロジェクト期間

2023（R5）年 10 月～

プロジェクトメンバー

- ・ 祐野 恵（京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット 特定講師）*研究代表者
- ・ 佐野 亘（京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授）
- ・ 八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 教授）

行政担当部署

文部科学省大臣官房人事課

取り組む課題

第 6 期科学技術・イノベーション基本計画では、博士人材の活用が目標として掲げられ、中央省庁における取り組みも施策に挙げられている。行政官における博士人材の一層の活用を進めるには、昇任・昇格基準の見直しを含めた戦略的な人事配置の実現が必要となっており、これまでの慣行に依らない国家公務員の人事管理と制度の構築が政策課題となっている。そこで、本プロジェクトでは、博士号の取得に起因する仮説検証能力や分野専門性に焦点を当て、我が国の政策形成における博士人材の有用性を規定する要因を実証的に明らかにする。

プロジェクト概要

博士号の取得に起因する仮説検証能力や分野専門性に焦点を当て、我が国の政策形成における博士人材の有用性を規定する要因を実証的に明らかにする。Ⅰ．採用時の評価における参照情報の提示、Ⅱ．博士人材の有用性に関するエビデンスの提示、Ⅲ．博士人材の人材育成における特徴の提示を目標に掲げ、入省前及び入省後の行政官の技能と OJT のあり方を含めた環境要因について分析する。

2024 年度の主たる研究成果

2024 年度においては、文部科学省科学技術系の行政官を対象とするサーベイ調査を用いた分析、及び、国際比較について、それぞれ研究を推進した。まず、サーベイ調査については、2024 年 4 月 10 日～19 日において実施し、78 名から回答を得た。その結果を用いた数量的な解析では、博士号を取得していることが、行政官による新規政策の立案数について、有意に正の影響を及ぼすことがわかった。国際比較については、オーストラリアを対象に調査を実施した。オーストラリアにおいては、労働者の流動性を促す仕組みとして、Australian Qualifications Framework が導入されており、博士の学位を他の職業資格と同等に位置づける枠組みがあるとわかった。これらの研究結果を検討するため、2024 年 5 月 17 日に、共同研究者の進捗に関する研究会を実施した。また、令和 6 年 12 月 2 日～8 日においてオーストラリアにて開催された、REvaluation Conference 2024 に祐野恵特定講師が出席し、各国の博士人材の活用状況について調査するとともに、ネットワーキングを図った。

なお、2024 年度において実施した研究については、Yuno, Megumi. 2025. What Are the Characteristics of PhD-holding Government Officials Responsible for Science and Technology Policy in Japan? F1000Research.、安藤加菜子・祐野恵。

2025. 「博士号を持つ公務員について-任用を通じた専門知の獲得に関する日豪比較」 オーストラリア・アジア研究紀要 (9), pp.1-14.としてジャーナルに採択された。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

本拠点 STiPS は、関西ネットワークの拡大を目的とした研究会やイベントを開催しています。2024 年度は、科学技術コミュニケーション分野の第一線で活躍する専門家を招いての研究会（シリーズの趣旨は後述）を開催し、新しいネットワークの開拓にも努めました。

STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

本シリーズは、将来的に専門知と社会をつなぐ仕事に関心のある学生を念頭に置き、実務経験者によるゲストレクチャーを含む、参加者同士のディスカッションを中心に進行します。具体的には、科学技術コミュニケーションとよばれる分野の第一線で活躍するゲスト講師（実践的研究者、デザイナー、ファシリテーター、ジャーナリスト、政策担当者、弁護士、弁理士、シンクタンク研究者等）を招き、それぞれがどのようにキャリアを形成してきたのか、特に専門知と社会をつなぐためにどのような仕事をしているのかについてお話を伺いながら、参加者も交えて議論をしました。

第 112 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：市民による商品テストの歴史－『暮らしの手帖』を例に
- ゲスト：西川 晃弘（大阪大学大学院人文学研究科 博士後期課程）
- 日時：2024 年 7 月 25 日（木）13:00～14:30
- 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

今回の研究会では、副専攻「公共圏における科学技術政策・研究プロジェクト+」を履修中の西川晃弘さん（大阪大学大学院人文学研究科 博士後期課程）が、主専攻で取り組んでいる課題に関連して、「市民による商品テストの歴史－『暮らしの手帖』を例に」をテーマに話題提供を行いました。大阪大学 CO デザインセンターの教職員や学生など 8 人が参加しました。活発な質疑応答も行われ、論文執筆に向けて考えを深めていたようでした。



CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001287.html>) に開催レポートを掲載しています。

第 113 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬） #1
- ゲスト：深川 浩史（三菱電機株式会社 統合デザイン研究所 UI デザイナー）
- 日時：2024 年 12 月 10 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

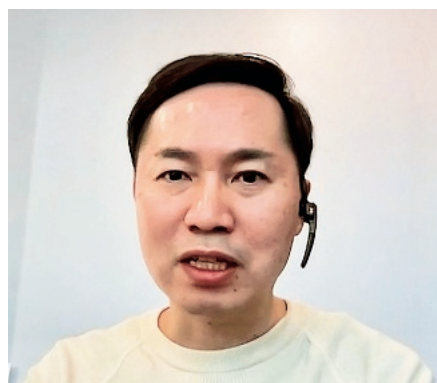
2024 年 12 月 10 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）」がスタートしました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 25 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 114 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬） #2
- ゲスト：喜久里 要（早稲田大学 リサーチイノベーションセンター）
- 日時：2024 年 12 月 17 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「「つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）」第 2 回を、2024 年 12 月 17 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 20 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 115 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬） #3
- ゲスト：山田 綾子（大阪大学 大学院法学研究科 助教）
- 日時：2024 年 12 月 24 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「「つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）」第 3 回を、2024 年 12 月 24 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 26 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 116 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬） #4
- ゲスト：田中 孝宣（大阪大学 ELSI センター 特任研究員／NEC Digital ID 事業開発統括部）
- 日時：2025 年 1 月 7 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「「つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）」第 4 回を、2025 年 1 月 7 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 25 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 117 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬） #5
- ゲスト：工藤 郁子（大阪大学 ELSI センター 特任准教授）
- 日時：2025 年 1 月 14 日（火）15:10～16:40
- 実施形態／場所：オンライン形式
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「「つなぐ人たちの働き方（2024 年度冬）」第 5 回を、2025 年 1 月 14 日（火）に実施しました（授業「実践者から学ぶ科学技術コミュニケーション」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 24 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 118 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：放送のプロフェッショナルと社会を考える（2024 年度）
- ゲスト：南野彩子（NHK 大阪放送局 ディレクター）、藤島新也（NHK 大阪放送局 記者）、横里征二郎（NHK 大阪放送局 チーフ・ディレクター）
- 日時：2024 年 11 月 5 日（火）10:00～18:00
- 実施形態／場所：NHK 大阪放送局
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2024 年 11 月 5 日（火）に、STiPS Handai 研究会「放送のプロフェッショナルと社会を考える（2024 年度）」を開催しました（集中講義「メディアリテラシー」の一環として開催）。NHK 大阪放送局の見学と、番組制作者からの講義などを行い、28 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

午前中は公共メディアの役割について、放送法に規定されている NHK の目的について、また、公共放送の役割について説明を受けた後、放送会館を見学しました。今回はニュースセンターや、NHK 大阪ホール、連続テレビ小説のセットがあるスタジオなどを見せていただきました。



番組の企画を考えるとところから、実際の制作現場までのプロセスを迫体験できる 1 日になりました。送り手の立場になってみないと分からない視点を踏まえて、参加者それぞれが「公共」や「放送」についての考えを深めることができたのではないのでしょうか。

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001259.html>) に開催レポートを掲載しています。

第 119 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：生態学における市民科学の実践：鶴の市民調査を例に
- ゲスト：武田 浩平（大阪大学 CO デザインセンター 特任助教）
- 日時：2025 年 3 月 13 日(木) 13:00～14:30
- 実施形態／場所：CO デザインスタジオ
- 主催： STiPS
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

この日は CO デザインスタジオで開催し、阪大の教職員 16 人が参加しました。

最初に、武田さんから生態学や保全の分野における市民科学の状況として、生き物の生息状況などはさまざまな地域を調べる必要があり、アマチュアの活躍が期待されていることや、スマートフォンやアプリを使ってどのようにデータが蓄積されているのかの一例などの紹介がありました。



続いて、武田さん自身も調査に参加している北海道での鶴の市民調査の様子をお話いただきました。とくに現地で撮影した映像を通じて、調査の方法や現場の雰囲気などが具体的に説明されました。1985 年から行われている調査について、参加者からは次々に質問が出て、それらに答えるような形で進められました。

話題提供の後は、野鳥などの生態調査を擬似的に体験しようと、キャンパス内の池の近くで鳥の観察をしました。

CO デザインセンターウェブサイト (<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2025/001286.html>) に開催レポートを掲載しています。

🍷 サイエンスカフェ@千里公民館

2017 年より、豊中市立千里公民館と共同でサイエンスカフェを開催しています。2019 年以降は、学生もグループファシリテーターとして参加し、参加者同士の対話をサポートしています。

サイエンスカフェ@千里公民館 第 22 回

- タイトル：世代をつなぐ細胞の研究と未来
- 進行：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- コメンテーター：古結 敦士（大阪大学大学院医学系研究科 助教）、磯野 萌子（大阪大学大学院医学系研究科 助教）、山下 大輔（大阪大学大学院医学系研究科 特任研究員）
- 日時：2024 年 6 月 15 日（土）10：00～12：00
- 実施形態／場所：千里公民館 集会場（千里文化センター「コラボ」2 階）
- 主催：豊中市立千里公民館
- 共催：STiPS、大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学社会技術共創研究センター

2024 年 6 月 15 日（土）に、サイエンスカフェ@千里公民館「世代をつなぐ細胞の研究と未来」を開催しました。今回のサイエンスカフェには、学生も含むさまざまな年代の方 17 人（イベント運営の関係者を除く）がご参加くださいました。



今回のテーマは「世代をつなぐ細胞の研究と未来」。
幹細胞から精子や卵子といった生殖細胞を体外でつくる研究（IVG 研究）は、この十数年で大きく進展してきました。この新しい技術と未来の社会について考えてみました。

今回、対話のお手伝いをしたのは、2024 年度春学期開講科目「ファシリテーション入門」でファシリテーションスキルについて学んだ受講生たちでした。グループでの対話をお手伝いした学生たちからは、「最初はうまく問いかけができずに戸惑ったけれど、対話のリズムができていくと話が弾んでいったのでホッとした」、「なかなか自分の意見を言えていなかった方に話を振ると、楽しそうに話をしてくださったことが印象に残った」といった感想が寄せられました。何かしらの手応えを感じていたようです。

CO デザインセンターのウェブサイト（<https://cscd.osaka-u.ac.jp/center/2024/001238.html>）に開催レポートを掲載しています。

❖ その他

- タイトル：どうなる！？未来の学校！！（「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2024」内ブース）
- 日時：2024 年 6 月 29 日（土）11:00～17:00
- 実施形態／場所：ららぽーと EXPOCITY 1F 光の広場
- 主催：大阪大学
- 企画：大阪大学 社会技術共創研究センター（若林 魁人・水町 衣里）
- 協力：STiPS

*JST/RISTEX「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム」プロジェクト企画調査「学習データ利活用 EdTech（エドテック）の ELSI 論点の検討」（代表者：加納圭）の一環として実施。

2024 年 6 月 29 日に開催された「大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2024」（主催：大阪大学）に、大阪大学社会技術共創研究センター（ELSI センター）が「どうなる！？未来の学校！！2024」を出展しました。

このブースでは、教育データを利活用する EdTech（Educational Technology, エドテック）の具体的な事例（海外事例も含む）を紹介しつつ、来場者のみなさんからは、思い出したエピソード、みなさんが感じた「ドキドキ」や「モヤモヤ」をお寄せいただきました。そして、集まった“お便り”を元に、ゲストを迎えつつ、ラジオ番組風のトークセッションを行いました。

当日は、ELSI センターのブースには、661 名のみなさまにお越しいただきました。届いた“お便り”は、事前にお送りいただいたものを含めて 33 通。加えて、子どもたちが書き込んでくれたたくさんの付箋（100 枚以上！）。

ELSI センターのウェブサイト（<https://elsi.osaka-u.ac.jp/contributions/2988>）に開催レポートが掲載されています。



7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2024 年度には、以下の活動を行うことができました。

I) PIT-UN（公益技術大学間ネットワーク）への参加

欧米諸国の大学が参加する Public Interest Technology University Network (PIT-UN: 公益技術大学間ネットワーク)へ STiPS として継続して参加しました。

II) 教育・研究面での新たな連携の試み

科学コミュニケーション研究会と協力してソウル国立大学物理教育学部教授のソン・ジンウン氏を招聘し、「科学の信頼」をテーマとした研究会を開催しました。

海外調査及び発表等

2024 年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2025 年 2 月 13 日から、平川秀幸教授が米国ボストンで行われたアメリカ科学振興協会(American Association for the Advancement of Science)の Annual Meeting に参加し、研究セキュリティ、科学外交のセッション、オープンアクセスについての国際研究動向の収集を行い、参加者と意見交換を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2024 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 38 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- Kei Hirai, Asayo Yamamura, **Yuko Matsumura**, Asako Miura, **Ekou Yagi**, Ryohei Fujino, Masaharu Tsubokura, Fumio Ohtaka. 2024. "Segmentation of the general public according to differences in knowledge and beliefs about radiation-cluster analysis by attitude, knowledge, belief and anxiety", Journal of Radiation Research 65(Supplement_1): i42-i51, 2024 年 12 月. 研究論文
- **辻田俊哉**. 2024. 「メディア（10 章 イスラエル）」, 日本ユダヤ学会編. 『ユダヤ文化事典』, 丸善出版, 2024 年 7 月. 寄稿
- **辻田俊哉**. 2024. 「もう一つの悪化する情勢「西岸地区」」, 『季刊アラブ』, 189: 11-13, 2024 年 10 月. 寄稿
- **辻田俊哉**. 2024. 「イスラエル「多正面作戦」の狙い：米大統領選後のネタニヤフ政権」, 『外交』, 88: Nov/Dec, 2024, 106-111, 2024 年 12 月. 寄稿
- **辻田俊哉**. 2025. 「イスラエルの対アフリカ関係：対外政策の目的とその評価に関する検討」, 『中東研究』, 552: 46-56, 2025 年 1 月. 研究論文
- 鈴木寛太郎, 大江龍太郎, 新城裕太, キョウ セイハ, ハ リン, リ ケン, **松村悠子**, 山崎吾郎. 2024. 「学生企画による PBL 活動の実施報告：日本の持続可能な水産業の形成について考える」, 『Co* Design NOTE』, 5: 1-25, 2024 年 7 月. 研究論文
- 芳賀智宏, 増田惟吹, 東出天舞音, 三井健矢, 堀啓子, **松村悠子**, 山口容平, 松井孝典, 石濱史子, 臼田裕一郎, 橋本祥. 2024. 「日本全国の太陽光発電施設と導入ポテンシャルの空間分布のギャップの分析」, 『環境情報科学論文集』, 38: 141-147, 2024 年 12 月. 研究論文
- 井上眞梨, 肥後楽, **鹿野祐介**, 鈴木径一郎. 2024. 「Go Bold な研究開発を支える倫理審査のための申請書導入：mercari R4D における取り組み」, 『ELSI NOTE』, 40: 1-40, 2024 年 4 月. 研究論文
- **鹿野祐介**. 2024. 「第 14 章 人工知能とビッグデータ」, 標葉隆馬, 見上公一編. 『入門 科学技術と社会』, ナカニシヤ出版, 148-156, 2024 年 5 月. 著書
- **岸本充生**, 田中孝宣, **水町衣里**, 鈴木径一郎, 長門裕介, カテライ アメリア, **鹿野祐介**, 井出和希. 2024. 「大阪大学における全学 DX 推進施策のリスクアセスメント：顔認証入場システムのケース」, 『ELSI NOTE』, 43: 1-21, 2024 年 6 月. 研究論文
- **鹿野祐介**. 2024. 「人デジタルクローン技術の ELSI を見据える—責任ある開発のための視点」『フィルカル : philosophy & culture : 分析哲学と文化をつなぐ』, 9(2): 65- 74, 2024 年 8 月. 寄稿
- **鹿野祐介**, 井出和希, **岸本充生**. 2024. 「昆虫飼料の利用に関する認識と価値観：小学生に対する教育実践とアンケート調査による前後比較」, 『ELSI NOTE』, 50: 1-37, 2024 年 10 月. 研究論文
- **鹿野祐介**, 肥後楽, 森下翔, 長門裕介, カテライ・アメリア, 鈴木径一郎, 工藤郁子, 井上眞梨, 多湖真琴, 標葉隆馬, **岸**

- 本充生**. 2024. 「産学連携での ELSI 研究における人文社会系研究者の役割：大阪大学 ELSI センターと mercari R4D による社会技術の共創」, 『研究 技術 計画』39 (3) :263- 280, 2024 年 12 月. 研究論文
- M. クーケルバーク著, 直江清隆, 佐藤駿, **鹿野祐介**訳. 2024. 『デジタルテクノロジーと時間の哲学』, 丸善出版, 2024 年 12 月. 翻訳
 - 井出和希, **鹿野祐介**, **岸本充生**. 2025. 「昆虫飼料に対する認識と価値観：小学生を対象とした教育実践とアンケート調査の概要」, 『養鶏の友』, 757: 39-43, 2025 年 3 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) オッペンハイマーと核開発 あの日の呪い、解くのは言葉」, 『朝日新聞』, 4 月 24 日朝刊, 2024 年 4 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 川勝氏とリニア、江戸の鉄砲 全ての技術は人類社会のため」, 『朝日新聞』, 5 月 29 日朝刊, 2024 年 5 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) エスビディアが世界一になって 生成 AI、深刻な電力消費」, 『朝日新聞』, 6 月 26 日朝刊, 2024 年 6 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「「紅翅」サブリー事件の深層」, 『世界』, 982: 98-106, 2024 年 6 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) トランプ氏銃撃、陰謀論の背景に 格差拡大が招く、政治不信」, 『朝日新聞』, 7 月 24 日朝刊, 2024 年 7 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 現場に判断委ねた南海トラフ地震情報 防災人材養成へ国は地域支援を」, 『朝日新聞』, 8 月 28 日朝刊, 2024 年 8 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 映画「シビル・ウォー」が描く米国の分断 ディストピアに重なる現実」, 『朝日新聞』, 9 月 25 日朝刊, 2024 年 9 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 相次ぐ新型強盗、不安だけれども データで考える日本の治安とリスク」, 『朝日新聞』, 10 月 23 日朝刊, 2024 年 10 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「「マイナ保険証」推進の背景には何があるのか」, 『大阪保険医雑誌』, 52(698): 12-15, 2024 年 10 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 単なる多数決だけが選挙ではない 民主主義深めるより良い仕組みを」, 『朝日新聞』, 11 月 27 日朝刊, 2024 年 11 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2024. 「(月刊安心新聞 plus) 繰り返される薬不足、問題の本質とは 医療に合わない「経済の論理」」, 『朝日新聞』, 12 月 25 日朝刊, 2024 年 12 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2025. 「(月刊安心新聞 plus) 「反ワクチン」派ケネディ氏、政権入りの衝撃 科学不信と陰謀論の芽」, 『朝日新聞』, 1 月 29 日朝刊, 2025 年 1 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2025. 「(月刊安心新聞 plus) 「欧」と「米」、自由民主主義にヒビ 怒り充満、格差是正が急務」, 『朝日新聞』, 2 月 19 日朝刊, 2025 年 2 月. 寄稿
 - **神里達博**. 2025. 「(月刊安心新聞 plus) 花粉症の原因は人間側に？ 環境激変、追いつけぬ身体」, 『朝日新聞』, 3 月 26 日朝刊, 2025 年 3 月. 寄稿
 - **岸本充生**. 2024. 「パーソナルデータ利活用のためのリスクマネジメント (1): プライバシー影響評価 (PIA) の制度化」, 『ELSI NOTE』, 39: 1-26, 2024 年 4 月. 研究論文
 - 榎本啄杜, 長門裕介, **岸本充生**. 2024. 「量子技術の ELSI を探る : 文献レビュー」, 『ELSI NOTE』, 41: 1-40, 2024 年 4 月. 研究論文
 - **岸本充生**. 2024. 「11 章 経済学者が取り組むテクノロジーのリスクアセスメント」, IT 批評編集部 編. 『生成 AI 時代の教養 技術と未来への 21 の問い』, 風濤社, 229-244, 2024 年 4 月. 著書

- Katirai A, Garcia N, Ide K, Nakashima Y, **Kishimoto A**. 2024. “Situating the social issues of image generation models in the model life cycle: a sociotechnical approach”, AI and Ethics, 2024 年 7 月. 研究論文
- 加納圭, 神崎宣次, **岸本充生**, 後藤崇志, 佐藤仁, 塩瀬隆之, 高橋哲, 藤村祐子, 堀口悟郎, **水町衣里**, 村上正行, 若林魁人. 2024. 「第 3 章 I 教育データ活用 EdTech (エドテック) の ELSI (倫理的・法的・社会的課題) 論点フレームワーク」, 磯部哲ほか編. 『怪獣化するプラットフォーム権力と法 IV 巻 プラットフォームと社会基盤』, 慶應義塾大学出版会, 161-181, 2024 年 10 月. 著書
- **岸本充生**. 2025. 「サイバーセキュリティリスクの定式化と非技術的要因に関する文献調査」, 『ELSI NOTE』, 51: 1-17, 2025 年 1 月. 研究論文

学会発表等

- **小林傳司**. 2024. 「科学技術・イノベーションと社会：ELSI/RRI を考える意義」, 日本工学会シンポジウム協議会公開シンポジウム (オンライン), 2024 年 12 月 12 日. 招待講演
- 平井啓, 山村麻予, **松村悠子**, 見上日奈子, 三浦麻子, **八木絵香**, 坪倉正治, 大竹文雄. 2024. 「がんや甲状腺に対する知識・態度によるセグメンテーションに応じたメッセージ効果の検証」, 日本社会心理学会第 65 回大会 (東京, 日本大学), 2024 年 9 月 1 日, ポスター発表
- 三上直之, **八木絵香**, 松浦正浩, 川上雅弘, 江守正多. 2024. 「気候市民会議の多様な開催を考える」, 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会 (東京, 東京大学), 2024 年 12 月 1 日. オーガナイズドセッション講演
- **辻田俊哉**. 2024. 「ガザをめぐる国際政治 (市民講座をかねる)」, 日本国際政治学会 2024 年度研究大会 (札幌市, 札幌コンベンションセンター), 2024 年 11 月 17 日. 討論
- **辻田俊哉**. 2024. 「ガザ紛争とイスラエルの戦略的岐路: 「ザ・デイ・アフター」と「多正面作戦」に関する議論をめぐって」, 国際安全保障学会 2024 年度年次大会 (京都市, 同志社大学新町キャンパス), 2024 年 12 月 8 日. 発表
- **松村悠子**. 2024. 「再生可能エネルギー開発と離島振興のローカルガバナンス」, 2024 年次日本島嶼学会熊本大会 (熊本, 東海大学), 2024 年 8 月 31 日. 発表
- 三井健矢, 東出天舞音, 増田惟吹, 芳賀智宏, **松村悠子**, 堀啓子, 山口容平, 松井孝典, 橋本禅. 2024. 「地域の生態系への影響を最小化するための再生可能エネルギーミックスの空間明示型多目的最適化ツールの開発」, 第 52 回環境システム研究論文発表会 (大阪, 関西大学), 2024 年 11 月 2 日. 口頭発表
- **松村悠子**. 2024. 「がん検診受診の意思決定を支援する情報提供コンテンツ開発」, 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会 (東京, 東京大学), 2024 年 12 月 1 日. 発表
- 白井哲哉, 井出和希, **鹿野祐介**, **水町衣里**. 2024. 「URA からみた ELSI/RRI に取り組む上での課題&ニーズマップ」, RA 協議会 第 10 回年次大会 (沖縄, 沖縄科学技術大学院大学), 2024 年 10 月 17 日. 発表
- **岸本充生**, 田中孝宣, **水町衣里**, 鈴木径一郎, 長門裕介, カテライ・アメリカ, **鹿野祐介**, 井出和希. 2024. 「大阪大学における全学 DX 推進施策のリスクアセスメント: 顔認証入場システムのケース」, 第 37 回日本リスク学会年次大会 (静岡市, 静岡県立大学), 2024 年 11 月 16 日. 発表
- **鹿野祐介**. 2024. 「責任ある研究開発と研究倫理審査 —異なる「倫理」とその隔たりを埋める実践—」 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会 (東京, 東京大学), 2024 年 12 月 1 日. 発表
- 佐藤陽太, **神里達博**. 2024. 「「植物虐待」を考える」, 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会 (東京, 東京大学), 2024 年 11 月 30 日. 発表
- **神里達博**. 2024. 「防災」, 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会 (東京, 東京大学), 2024 年 12 月 1 日. 座長
- **岸本充生**. 2024. 「AI リスクのガバナンスの動向とリスク学の貢献可能性」, 第 37 回日本リスク学会シンポジウム「AI のリスクを考える: 生体認証技術から生成 AI まで」 (オンライン), 2024 年 6 月 21 日. 発表

- **岸本充生**. 2024. 「新規技術の社会の間のギャップを埋める：ELSI とレギュラトリーサイエンス」, 第 45 回日本歯内療法学会学術大会 倫理講習会 (大阪, ライフサイエンスセンター), 2024 年 7 月 20 日, 講演
- 宮地充子, **岸本充生**, 東龍之介. 2024. 「医療機関の脆弱性と攻撃利得からの脅威分析」, コンピュータセキュリティシンポジウム 2024 (CSS2024) (神戸市, 神戸国際会議場) 2024 年 10 月 23 日, 発表
- 亀石久美子, 瀬野恭彦, 狩野俊明, **岸本充生**. 2024. 「自治体スマートシティのデータ連携基盤におけるガバナンス及びプライバシー影響評価についての検討」, コンピュータセキュリティシンポジウム 2024 (CSS2024) (神戸市, 神戸国際会議場) 2024 年 10 月 23 日, 発表
- **岸本充生**. 2024. 「研究開発ライフサイクルにおける研究倫理審査的視点の現状」, 科学技術社会論学会 第 23 回年次研究大会(東京, 東京大学), 2024 年 12 月 1 日. オーガナイズドセッション. 発表
- 亀石久美子, 原口和徳, 瀬野恭彦, 川淵聡士, 石田龍, 井上滉大, 狩野俊明, **岸本充生**. 2025. 「データ連携基盤における ELSI を踏まえた リスクアセスメント手法の実践」, 情報処理学会第 107 回 EIP 研究発表会 (京都市, 同志社大学), 2025 年 2 月 13 日, 発表
- **岸本充生**. 2025. 「教育データ利活用における ELSI (倫理的・法的・社会的課題) と対応アプローチ」, 日本学術会議公開シンポジウム「教育 DX のためのデータ利活用について考える」(京都市, 京都大学), 2025 年 3 月 19 日, 講演

社会活動（講演会・展示会などアウトリーチ活動等）

- **小林傳司**. 2024. パネリスト, JST-RISTEX RInCA クロストーク 2024 #02「未来のイノベーションと社会の調和：ELSI/RRI を取り入れるヒント」(東京, CIC Tokyo), 2024 年 10 月 24 日.
- **小林傳司**. 2025. 招待講演「科学技術社会論から見た科学／理科教育」, 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構 次世代教育研究グループ第三回公開セミナー (東京, 東京学芸大学), 2025 年 1 月 13 日.
- **小林傳司**. 2025. 招待講演「データは大切、そしてデータを疑うことはもっと大切：総合知の視点から考える」, 北海道高等学校教育研究集会 (札幌市, カナモトホール), 2025 年 1 月 8 日.
- **小林傳司**. 2025. 講演採録「科学技術社会論から見た科学／理科教育」, 『「未来のカリキュラム」をどう創るか～可能性と課題～」, 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構, 2025 年 3 月.
- **平川秀幸**. 2024. 講演『「共生の対話」としてのリスクコミュニケーションのために」, 大阪いずみ市民生協・わかやま市民生協主催：市民連続講座「食の安全情報アップデート」(堺市, 大阪いずみ市民生協), 2024 年 7 月 29 日.
- **八木絵香**. 2024. 企画、進行「ワークショップ：気候市民会議の多様な開催を考える・その 3」(大阪市, 大阪大学中之島センター), 2024 年 4 月 19 日.
- **八木絵香**. 2024. 企画、進行「世代をつなぐ細胞の研究と未来」, サイエンスカフェ@千里公民館 第 22 回 (豊中市, 千里公民館集会場), 2024 年 6 月 15 日.
- **八木絵香**. 2024. コメント掲載「核ごみ文献調査報告案 火山調査、安全優先対応で歯切れ悪く」, 『北海道新聞』, 2024 年 8 月 1 日電子版, 2024 年 8 月 1 日.
- **鹿野祐介**, **八木絵香**, **水町衣里**. 2024. 2024 年度新任教員研修・FD プログラム「科学技術の ELSI (倫理的・法的・社会的課題) と責任ある研究開発を検討する実践的協働の手法」(大阪大学) 2024 年 10 月 31 日.
- **八木絵香**. 2024. 企画、進行「未来のまちづくりワークショップ：大阪いばらき気候市民会議 2024」, 大阪いばらき気候市民会議 2024 (茨木市, 茨木市文化・子育て複合施設), 2024 年 12 月 15 日.
- **八木絵香**. 2025. 司会「全国 ELSI センターの取り組み」, ELSI Hiroshima ワークショップ 2025 (広島市, 広島大学), 2025 年 3 月 17～18 日.

- 辻田俊哉. 2024. インタビュー記事掲載「論考：「激化させない」意思表示か 平穏な街、くすぶる不穏 限定的な攻撃に安堵／強硬策訴える声 イスラエル、イランを攻撃」,『朝日新聞』,4月20日電子版,2024年4月20日.
- 辻田俊哉. 2024. 招待講演「イスラエル・ハマス紛争と中東問題」,NPO 法人国際生涯学習文化センター主催「中東問題講演会」(大阪市,大阪府社会福祉会館),2024年5月18日.
- 辻田俊哉. 2024. 招待講演「イスラエルと中東問題：ガザ紛争、レバノン紛争と地域情勢への影響」,NPO 法人大阪府高齢者大学校(大阪市,大阪府助産師会館),2024年7月10日.
- 辻田俊哉. 2024. 招待講演「イスラエル トリレンマを抱える国家にとっての選択」,現代中東研究コロキウム特別シンポジウム「第 X 次中東戦争はなぜ続くのか? : イスラエルとハマスの戦闘開始から 1 年」(京都市,立命館大学朱雀キャンパス),2024年10月6日.
- 辻田俊哉. 2024. 招待講演「イスラエルとパレスチナ対立の背景：ガザ紛争、レバノン紛争と中東問題への影響」,HSC マイスターゼミナール(尼崎市,尼崎市女性センター・トレビエ),2024年10月24日.
- Tsujita T. 2024. 招待講演「Analyzing Asymmetric Conflicts: Methods, Approaches, and Challenges」,立命館大学中東・イスラーム研究センター等共催セミナー(京都市,立命館大学),2024年10月31日.
- 辻田俊哉. 2024. 招待講演「イスラエル・ガザ紛争と中東地域秩序への影響」,比較経済研究所・法政大学大学院経済学研究科共催公開講演会(東京,法政大学市ヶ谷キャンパス),2024年11月5日.
- 辻田俊哉. 2025. コメント出演「恒久的な停戦に向けたロードマップも…残された課題は ハマスとイスラエルが停戦合意」,『報道ステーション』,2025年1月16日.
- 松村悠子. 2025. 講師「放射線の知識・不安に関するセグメンテーションおよび情報発信コンテンツ開発の研究結果から」,環境省ぐるプロジェクト研修会(オンライン),2025年1月28日.
- 神里達博. 2024. インタビュー記事掲載「科学技術の発展と未来社会の仕組みづくり～ELSI と RRI の役割」,『CHIBADAI NEXT』,2024年7月16日.
- 岸本充生. 2024. コメント掲載「世界で広がるロビイング活動の可視化 日本では規制もなく、実態も不透明なまま」,『The Asahi Shimbun GLOBE+』,2024年5月2日.
- 岸本充生. 2024. 対談記事掲載「多様な人同士の対話によって DX が加速する デジタルエシックス(倫理)の本質と競争力との関係」,『wisdom』,2024年6月25日.
- 岸本充生. 2024. 講義「新しい科学技術が社会に受け入れられるためには?」,SEEDS2024 分野横断型ワークショップ「『脱炭素社会に向けた動き』をいろんな側面から考えてみる」(大阪大学),2024年8月4日.
- 岸本充生. 2024. 講師「新規技術の社会実装からみる DE&I-ELSI センターでの取り組み」,大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンター アンコンシャス・バイアス研修(オンライン),2024年9月10日.
- 岸本充生. 2024. 講師,琵琶湖博物館 研究倫理研修「博物館の諸活動における倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」(草津市,滋賀県立琵琶湖博物館),2024年11月28日.
- 岸本充生. 2024. 話題提供「その EdTech、マズくない? 炎上を未然に防ぐには」,サイエンスアゴラ in 滋賀「どうなる? どうする!? 教育 DX」(大津市,滋賀大学),2024年12月8日.
- 岸本充生. 2025. 解説記事掲載「(連載記事:ELSI 最前線) 自動運転車、フリマアプリ、電動キックボード… 新技術が「安全である」と誰が示す? なぜ今 ELSI を考える必要があるのだろうか(1)」,『シンクロナス』,2025年3月5日電子版,2025年3月5日.
- 岸本充生. 2025. 解説記事掲載「(連載記事:ELSI 最前線) 技術革新が生む空白をどう埋める? プライバシー、ヒトゲノム、生成 AI… ELSI の原点とは なぜ今 ELSI を考える必要があるのだろうか(2)」,『シンクロナス』,2025年3月12日電子版,2025年3月12日.

- **岸本充生**. 2025. コメント記事掲載「AI が広げる社会ギャップ「ELSI で対応を」中央大・阪大サミット」, 『朝日新聞』, 3月15日電子版, 2025年3月15日.
- **岸本充生**. 2025. パネリスト「全国 ELSI センターの取り組み」, ELSI Hiroshima ワークショップ 2025 (広島市, 広島大学), 2025年3月17~18日.
- **岸本充生**. 2025. 解説記事掲載「(連載記事: ELSI 最前線) 法的に OK でも社会的に NG? 技術革新による「炎上」はなぜ起きるのか なぜ今 ELSI を考える必要があるのだろうか (3)」, 『シンクロナス』, 2025年3月19日電子版, 2025年3月19日.
- **岸本充生**. 2025. 取材記事掲載「生成 AI 登場で生じた技術と社会のギャップ 法ではないよりどころは」, 『朝日新聞』, 3月22日電子版, 2025年3月22日.
- **岸本充生**. 2025. 解説記事掲載「(連載記事: ELSI 最前線) 不確かな時代には「倫理」が羅針盤に。ELSI 対応はビジネスそのものである なぜ今 ELSI を考える必要があるのだろうか (4)」, 『シンクロナス』, 2025年3月26日電子版, 2025年3月26日.
- **水町衣里**. 2024. 企画「世代をつなぐ細胞の研究と未来」, サイエンスカフェ@千里公民館 第22回 (豊中市, 千里公民館集会場), 2024年6月15日.
- **水町衣里**. 2024. 企画・講師, SEEDS2024 分野横断型ワークショップ「『脱炭素社会に向けた動き』をいろんな側面から考えてみる」(大阪大学), 2024年9月21日.
- **水町衣里**. 2024. 講師, 琵琶湖博物館 研究倫理研修「博物館の諸活動における倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」(草津市, 滋賀県立琵琶湖博物館), 2024年11月28日.
- **水町衣里**. 2024. 企画・第1部司会, サイエンスアゴラ in 滋賀「どうなる? どうする!? 教育 DX」(大津市, 滋賀大学), 2024年12月8日.
- **水町衣里**. 2025. 話題提供「科学技術と社会をつなぐための実践」, ELSI Hiroshima ワークショップ 2025 (広島市, 広島大学), 2025年3月17~18日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Masato Takeuchi, Korenori Arai, Shunsuke Fujibayashi, Bungo Otsuki, Koichi Murata, Takayoshi Shimizu, Shuichi Matsuda, and **Koji Kawakami**. 2024. “Are dental procedures associated with pyogenic vertebral osteomyelitis?”, *Clinical Orthopaedics and Related Research*, 482(4): 716-723, 2024 年 4 月. 研究論文
- Takanori Yanai, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2024. “The association between children's autism spectrum disorders and central 2 nervous system infections: Using a nationwide claims database”, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 55(5):1688-1696, 2024 年 5 月. 研究論文
- Toshiki Fukasawa, Etsuro Nakanishi, Hiroo Shimoda, Katsumi Shinoda, Satoru Ito, Shinji Asada, Satomi Yoshida, Sachiko Tanaka-Mizuno, Kayoko Mizuno, Ryosuke Takahashi, and **Koji Kawakami**. 2024. “Adherence to istradefylline in patients with Parkinson’s disease: A group-based trajectory analysis”, *Journal of the Neurological Sciences*, 464: 123092, 2024 年 7 月. 研究論文
- Hitoshi Sakurai, Masayuki Nakashima, Takashi Tsuboi, Kenji Baba, Tadashi Nosaka, Koichiro Watanabe, and **Koji Kawakami**. 2024. “Effect of prior depression diagnosis on bipolar disorder outcomes.: A retrospective cohort study using a medical claims database”, *Neuropsychopharmacology Reports*, 44(3):591–598, 2024 年 7 月. 研究論文
- Sachiko Tanaka-Mizuno, Kenichi Fujimoto, Kazuo Mishima, Yukinori Sakata, Toshiki Fukasawa, Kayoko Mizuno, Satomi Yoshida, Mika Ishii, Takehiro Taninaga, Naoki Kubota, Margalet Molene, and **Koji Kawakami**. 2024. “Evaluation of prescribing patterns of switching to and add-on lemborexant in patients treated with hypnotic medication: A nationwide claims database study in Japan”, *Expert Opinion on Pharmacotherapy*, 25(12):1707-1716, 2024 年 8 月. 研究論文
- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Bungo Otsuki, Koichi Murata, Takayoshi Shimizu, Takashi Sono, Shintaro Honda, Koichiro Shima, Masaki Sakamoto, Shuichi Matsuda, and **Koji Kawakami**. 2024. Unchanged Incidence of major adverse events amidst rising surgical interventions for osteoporotic vertebral fractures, 2015–2021. *Archives of Osteoporosis*, 19(1):71, 2024 年 8 月. 研究論文
- Liu Hao, Toshiki Fukasawa, Takayuki Anno, Masato Takeuchi, Sho Shimazaki, Tao Yang, and **Koji Kawakami**. 2024. “Incidence, prevalence, and treatment of Moyamoya disease in Japan: A population based descriptive study”, *Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases*, 33(8): 107770, 2024 年 8 月. 研究論文
- Mitsuhiro Shikamura, Atsushi Takayama, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2024. “Comparative effectiveness of sodium-glucose cotransporter-2 inhibitors and dipeptidyl peptidase-4 inhibitors in improvement of fatty liver index in patients with type 2 diabetes mellitus and non-alcoholic fatty liver disease: A retrospective nationwide claims database study in Japan”, *Diabetes, Obesity and Metabolism*, 26(8):3099-3109, 2024 年 8 月. 研究論文
- Kentaro Miyake, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, and **Koji Kawakami**. 2024. “Optimum timing of tracheostomy after cardiac surgery: Descriptive claims database study”. *Annals of Thoracic Surgery Short Report*, 2(3): 590-595, 2024 年 9 月. 研究論文
- 高山厚, 川上浩司. 2024. 「リアルワールドデータ活用における AI の可能性」, 『腎と透析』, 97(4): 623-627, 2024 年 10 月. 寄稿
- Koji Endo, Kayoko Mizuno, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2024. “Association between arterial pulse waveform analysis and mortality in patients with septic shock: A retrospective cohort study using Japanese Diagnosis Procedure

Combination data”, Journal of Intensive Care Medicine, 39 (10): 939-948, 2024 年 10 月. 研究論文

- 高山厚, 櫻井洸太郎, 川上浩司. 2024. リアルワールドデータを用いた臨床疫学研究の最前線. 日本麻酔科学会雑誌 麻酔 73 巻増刊号, S171-178, 2024 年 11 月. 寄稿
- Atsushi Takayama, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2024. “Tadalafil use is associated with a lower incidence of type 2 diabetes in men with benign prostatic hyperplasia: A population-based cohort study”, Journal of Internal Medicine, 296: 422-434, 2024 年 11 月. 研究論文
- Gaku Fujiwara, Naoki Kondo, Hideki Oka, Akihiro Fujii, and **Koji Kawakami**. 2024. “Regional disparities in hyperacute treatment and functional outcomes after acute ischemic stroke in Japan”, Journal of Atherosclerosis and Thrombosis, 31(11):1571-1590, 2024 年 11 月. 研究論文
- Takayuki Anno, Toshiki Fukasawa, Tomohiro Shinozaki, Masato Takeuchi, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2024. “Impact of early resumption of oral anticoagulation on recurrence after surgery for chronic subdural hematoma in patients with atrial fibrillation: A target trial emulation”, Pharmacoepidemiology and Drug Safety, 33: e70063, 2024 年 12 月. 研究論文
- Toshiki Fukasawa, Kota Matsumoto, Kotaro Sasaki, Yukako Nakagami, Yuta Goto, Yusuke Sakamoto, Yukihiro Washimi, Sachiko Tanaka-Mizuno, Satomi Yoshida, Kayoko Mizuno, Yuta Kamada, Mika Ishii, and **Koji Kawakami**. 2025. “Initiation of psychotropic drugs in spouses of patients with early-onset Alzheimer’s disease: A matched cohort study”, International Journal of Geriatric Psychiatry, 40(1):e70041, 2025 年 1 月. 研究論文
- 伊勢田哲治. 2024. 「私にとって科学とは なぜ科学は哲学の問題になるのか」, 『現代化学』, 637, 42-44, 2024 年 4 月. 寄稿
- 伊勢田哲治. 2024. 「倫理学を ELSI/RRI に役立てようとするのはよいことか」, 『倫理学研究』, 54, 6-16, 2024 年 7 月. 論文
- Takehiko I Hayashi, Manuela Gertrud Hartwig, Seita Emori, **Wataru Sano**. 2025. “Compiling scientific risk assessment and normative analyses in a single chart: development of a framework including exposure-pathway-targets and value arguments”, Human and Ecological Risk Assessment: An International Journal, 1–21. 2025 年 3 月. <https://doi.org/10.1080/10807039.2025.2479734> 研究論文
- **Takashi Sekiyama**. 2024. “Ministry of Foreign Affairs (MoFA)”, In Mieko Nakabayashi, Hideaki Tanaka eds. Handbook of Japanese Public Administration and Bureaucracy, MHM, 2024 年 10 月. 著書
- Ayame Ishida, **Takashi Sekiyama**. 2024. “Variables influencing students' learning motivation: critical literature review”, Frontiers in Education, 9: 1445011, 2024 年 10 月. 研究論文
- 関山健. 2024. 「(経済教室) COP29 後の温暖化対策 先進国と途上国 残る対立」, 『日本経済新聞』, 2024 年 12 月 16 日デジタル版. 2024 年 12 月, 寄稿
- 関山健. 2025. 「COP29 途上国の不満と「トランプ 2.0」」, 『外交』, 89: 132-137, 2025 年 1 月. 寄稿
- 関山健. 2025. 「平時や有事でのエネルギー資源・食料の調達をどうするか」, 秋山昌廣, 小黒一正, 関山健 (共編). 『論点解説 日本の安全保障』, 日本経済新聞出版, 2025 年 2 月. 著書
- 関山健. 2025. 「気候変動による施設・装備・運用への影響にどう対処するか」, 秋山昌廣, 小黒一正, 関山健 (共編). 『論点解説 日本の安全保障』, 日本経済新聞出版, 2025 年 2 月. 著書
- 関山健. 2025. 「経済安全保障において経済と安全はどのようにバランスをとるべきか」, 秋山昌廣, 小黒一正, 関山健 (共編). 『論点解説 日本の安全保障』, 日本経済新聞出版, 2025 年 2 月. 著書
- 関山健. 2025. 「気候変動と災害」, 中林美恵子 (編). 『危機管理の基礎と実践』, 三和書籍, 2025 年 3 月. 著書
- Kenta Morimoto, Jojiro Ishitobi, Kosuke Noguchi, Ryoichi Kira, Yukiya Kitayama, Yuto Goto, Daisuke Fujiwara,

- Masataka Michigami, Atsushi Harada, Tomoka Takatani-Nakase, Ikuo Fujii, **Shiroh Futaki**, Masamitsu Kanada, Ikuhiko Nakase. 2024. “Extracellular Microvesicles Modified with Arginine-rich Peptides for Active Macropinocytosis Induction and Delivery of Therapeutic Molecules”, *ACS Applied Materials & Interfaces*, 16: 14, 17069–17079, DOI: 10.1021/acsami.3c14592. 2024 年 4 月. 研究論文
- Shunsuke Yoshie, Masashi Kuriyama, Masashi Maekawa, Wei Xu, Takuro Niidome, **Shiroh Futaki**, Hisaaki Hirose. 2024. “ATP2B4 is an Essential Gene for Epidermal Growth Factor-induced Macropinocytosis in A431 cells”, *Genes to Cells*, 29: 6, 512–520, DOI: 10.1111/gtc.13118. 2024 年 6 月. 研究論文
 - Kenko Otonari, Yuri Asami, Kosuke Ogata, Yasushi Ishihama, **Shiroh Futaki**, Miki Imanishi. 2024. “Highly Sequence-specific, Timing-controllable m6A Demethylation by Modulating RNA-binding Affinity of m6A Erasers”, *Chem. Commun*, 61: 1, 69–72, DOI: 10.1039/d4cc04070h. 2024 年 8 月. 研究論文
 - Yoshimasa Kawaguchi, Sakahiro Terada, **Shiroh Futaki**. 2024. “An approach for the Intracellular Delivery of IgG via Enzymatic Ligation with a Cell-permeable Attenuated Cationic Amphiphilic Lytic Peptide”, *Bioorganic & Medicinal Chemistry*, 111, 117835, DOI: 10.1016/j.bmc.2024.117835. 2024 年 9 月. 研究論文
 - Junya Michibata, Yoshimasa Kawaguchi, Hisaaki Hirose, Akiko Eguchi, Sayaka Deguchi, Kazuo Takayama, Wei Xu, Takuro Niidome, Yoshihiro Sasaki, Kazunari Akiyoshi, **Shiroh Futaki**. 2024. “Polysaccharide-Based Coacervate Microgel Bearing Cationic Peptides That Achieve Dynamic Cell-Membrane Structure Alteration and Facile Cytosolic Infusion of IgGs”, *Bioconjugate Chemistry*, 35: 12, 1888–1899, DOI: 10.1021/acs.bioconjchem.4c00344. 2024 年 11 月. 研究論文
 - Shiori Hirase, Yurina Araki, Yoshihide Hattori, Ayako Aoki, Daisuke Fujiwara, Masataka Michigami, Tomoka Takatani-Nakase, Ikuo Fujii, **Shiroh Futaki**, Mitsunori Kirihaata, Ikuhiko Nakase. 2025. “Simple Cytosolic and Nuclear Introduction of Boron Compounds Using Cationic Lipids to Enhance Cancer Cell-killing Activity in Boron Neutron Capture Therapy”, *Biological and Pharmaceutical Bulletin*, 48: 4, 344–354, DOI: 10.1248/bpb.b24-00651. 2025 年 1 月. 研究論文
 - Masashi Kuriyama, Hisaaki Hirose, Yoshimasa Kawaguchi, Junya Michibata, Masashi Maekawa, **Shiroh Futaki**. 2025. “KCNN4 as a Genomic Determinant of Cytosolic Delivery by the Attenuated Cationic Lytic Peptide L17E”, *Molecular Therapy*, 33: 2, 595–614, DOI: 10.1016/j.ymthe.2024.12.050. 2025 年 2 月. 研究論文
 - **Shiho Koizumi**, Kazuki Ide, **Carl Becker**, Tomoe Uchida, Miho Ishizaki, et al. 2024. “Research integrity in Instructions for Authors in Japanese medical journals using ICMJE Recommendations: A descriptive literature study”, *PLOS ONE*, 19: 7, e0305707. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0305707>. 2024 年 7 月. 研究論文
 - **Carl Becker**, Taniyama Y, Kondo-Arita M, Yamamoto K. 2024. “Costly Causes of Funeral Dissatisfaction and Satisfaction: Responses to an All-Japan Survey”, *Psychology International*, 6: 3, 722-733, doi.org/10.3390/psycholint6030045. 2024 年 8 月. 研究論文.
 - **宮野公樹**. 2024. 「人にとって休むことの意味」, 『手をつなぐ: 元気のでる情報・交流誌』, 821: 24–25, 2024 年 7 月. 寄稿
 - **宮野公樹**. 2024. 「講演録: 研究者の情報発信を学問の観点から考える」, 『金属』, 84: 66-71, 2024 年 11 月. 寄稿
 - **宮野公樹**. 2024. 「京大 100 人論文 2024 年度」, 京都大学学際融合教育研究推進センター, 2025 年 3 月 31 日. 制作・執筆
 - **Megumi Yuno**. 2025. “What Are the Characteristics of PhD-holding Government Officials Responsible for Science and Technology Policy in Japan?” [version 1; peer review: awaiting peer review]. *F1000Research*, 14:312, 2025 年 3 月. 研究論文
 - 安藤加菜子, **祐野恵**. 2025. 「博士号を持つ公務員について: 任用を通じた専門知の獲得に関する日豪比較」, 『オーストリア・アジア研究紀要』, 第 9 号, 1-14, 2025 年 3 月. 研究論文

学会発表等

- Etsuro Nakanishi, Toshiki Fukasawa, Katsumi Shinoa, Hiroo Shimoda, Satoru Ito, Shinji Asada, Satomi Yoshida, Sachiko Tanaka-Mizuno, Kayoko Mizuno, Ryosuke Takahashi, and **Koji Kawakami**. 2024. “Adherence patterns of istradefylline treatment in patients with Parkinson’s disease: A group-based trajectory analysis”, American Academy of Neurology (AAN) 2024 (Denver, CO, USA), 4 月 13-18 日, 2024, ポスター発表
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 藺隆, 本田新太郎, 嶋皓一郎, 阪本将暉, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 「入院加療を要する骨粗鬆症性椎体骨折患者に対する治療法の変遷が全身合併症発生頻度に与える影響」, 第 53 回日本脊椎脊髄病学会 (横浜), 2024 年 4 月 18 日~20 日, 口演
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 竹内正人, 新井是則, 藤林俊介, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 歯科処置と化膿性脊椎炎の関連: ケース・クロスオーバー研究. 第 53 回日本脊椎脊髄病学会 (横浜), 2024 年 4 月 18 日~20 日, 口演
- Soichiro Masuda, Toshiki Fukasawa, Bungo Otsuki, Koichi Murata, Takayoshi Shimizu, Takashi Sono, Shintaro Honda, Koichiro Shima, Masaki Sakamoto, Shuichi Matsuda, and **Koji Kawakami**. 2024. “Comparison of reoperation incidence and cost after anterior versus posterior decompression and fusion for cervical ossification of the posterior longitudinal ligament: Analysis of a large claims-based database”, 第 53 回日本脊椎脊髄病学会 (横浜), 2024 年 4 月 18 日~20 日, 口演
- Masashi Kubota, Mutsushi Kawakita, Satomi Yoshida, Toshinari Yamasaki, Ryoma Kurahashi, Kimihiro Shimatani, Yuya Sekine, Atsuro Sawada, Hiromitsu Negoro, Shusuke Akamatsu, **Koji Kawakami**, Takashi Kobayashi, and Takayuki Goto. 2024. “Comparative effects of thienopyridine class antiplatelets and aspirin on bleeding and thrombotic complications following robot-assisted radical prostatectomy”, 第 111 回日本泌尿器科学会総会 (横浜), 2024 年 4 月 25 日~27 日, ポスター発表
- 中尾葉子, **川上浩司**. 2024. 「一般集団における心不全発症予測モデルに関するシステムティックレビューおよびメタ解析」, 第 60 回日本循環器病予防学会学術集会 (東京), 2024 年 5 月 11 日~12 日, 口演
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 藺隆, 本田新太郎, 嶋皓一郎, 阪本将暉, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 「頸椎後縦靱帯骨化症に対する前方除圧固定術と後方除圧間固定術の術後再手術率と医療費の比較」, 第 97 回日本整形外科学会学術総会 (福岡), 2024 年 5 月 23 日~26 日, ポスター発表
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 藺隆, 本田新太郎, 嶋皓一郎, 阪本将暉, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 「入院加療を要する骨粗鬆症性椎体骨折患者に対する治療法の変遷が全身合併症発生頻度に与える影響」, 第 97 回日本整形外科学会学術総会 (福岡). 2024 年 5 月 23 日~26 日, 口演
- 榊田崇一郎, 深澤俊貴, 竹内正人, 新井是則, 藤林俊介, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 「歯科処置と化膿性脊椎炎の関連: ケース・クロスオーバー研究」, 第 97 回日本整形外科学会学術総会 (福岡), 2024 年 5 月 23 日~26 日, ポスター発表
- 中西悦郎, 深澤俊貴, 篠田克己, 下田浩央, 伊藤智, 浅田真治, 吉田都美, 田中佐智子, 水野佳世子, 高橋良輔, **川上浩司**. 2024. 「パーキンソン病患者におけるイストラデフィリン治療の服薬アドヒアランスパターン」, 第 65 回日本神経学会学術大会 (東京), 2024 年 5 月 29 日~6 月 1 日, 口演
- 櫻井準, 中嶋雅之, 坪井貴嗣, 野坂忠史, 馬場健次, 渡邊衡一郎, **川上浩司**. 2024. 「先行するうつ病の診断が双極症の転帰に及ぼす影響: レセプトデータを用いたレトロスペクティブコホート研究」, 第 120 回日本精神神経学会学術総会 (札幌), 2024 年 6 月 20 日~22 日, ポスター発表
- 坪井貴嗣, 中嶋雅之, 櫻井準, 野坂忠史, 馬場健次, 渡邊衡一郎, **川上浩司**. 2024. 「双極性障害に対する薬物治療の変遷: レセプトデータを用いた記述疫学研究」, 第 120 回日本精神神経学会学術総会 (札幌), 2024 年 6 月 20 日~22 日, ポスター発表
- 櫻井準, 中嶋雅之, 坪井貴嗣, 野坂忠史, 馬場健次, 渡邊衡一郎, **川上浩司**. 2024. 「先行するうつ病の診断が双極症の転

帰に及ぼす影響：レセプトデータを用いたレトロスペクティブコホート研究」, 第 120 回日本精神神経学会学術総会 (札幌), 2024 年 6 月 21 日, ポスター発表

- Etsuro Nakanishi, Toshiki Fukasawa, Katsumi Shinoda, Hiroo Shimoda, Satoru Ito, Shinji Asada, Satomi Yoshida, Sachiko Tanaka-Mizuno, Kayoko Mizuno, Ryosuke Takahashi, and **Koji Kawakami**. 2024. “Adherence patterns of istradefylline treatment in patients with Parkinson’s disease: A group-based trajectory analysis”, The 3rd Annual Advanced Therapeutics in Movement & Related Disorders Congress (Washington, DC, USA), 6 月 22～25 日, 2024, ポスター発表
- 坂本享史, 錦織達人, 後藤励, 角田茂, **川上浩司**, 中山健夫, 久森重夫, 肥田侯矢, 小濱和貴. 2024. 「ナショナルデータベースを用いた食道切除術の年間切除件数と周術期医療費の関連」, 第 78 回日本食道学会学術集会 (東京), 2024 年 7 月 4 日～5 日, ポスター発表
- 林綾乃, 水野佳世子, 新川神奈, 迫田和典, 吉田都美, 竹内正人, 柳田素子, **川上浩司**. 2024. 「糖尿病性腎臓病患者における多職種介入による腎不全教育での腎予後に関する研究」, 第 10 回地域包括ケア病棟研究大会 (東京), 2024 年 7 月 6 日, ポスター発表
- 榎田崇一郎, 深澤俊貴, 松田秀一, 吉田都美, **川上浩司**. 2024. 「ロモソズマブとテリパラチドの骨折予防効果ならびに心血管リスクの比較」, 第 26 回日本骨粗鬆症学会 (金沢), 2024 年 10 月 11 日～13 日, ポスター発表
- 榎田崇一郎, 深澤俊貴, 猪口翔一郎, 大槻文悟, 村田浩一, 清水孝彬, 藺隆, 本田新太郎, 嶋皓一郎, 阪本将暉, 松田秀一, **川上浩司**. 2024. 「入院加療を要する骨粗鬆症性椎体骨折患者の退院時 ADL 不良の予測モデルの開発と検証」, 第 26 回日本骨粗鬆症学会 (金沢), 2024 年 10 月 11 日～13 日, ポスター発表
- Takanori Yanai, Satomi Yoshida, and **Koji Kawakami**. 2024. “Gastroenteritis hospitalizations over 18-year before and after rotavirus vaccine: Descriptive study using a nationwide database”, 16th Asian Conference for Pharmacoepidemiology (Tokyo, Japan), 2024 年 10 月 12～14 日, ポスター発表
- Hinako Wakabayashi, Toshiki Fukasawa, Satomi Yoshida, Kairi Ri, Soichiro Masuda, Takayuki Anno, and **Koji Kawakami**. 2024. “Risk of fracture associated with pregabalin or mirogabalin use: A case-case-time-control study”, 16th Asian Conference for Pharmacoepidemiology (Tokyo, Japan), 2024 年 10 月 12～14 日, 口演
- 稲山嘉英, 山口建, 水野佳世子, 田中佐智子, 小池彩美, 東山希実, 滝真奈, 山ノ井康二, 村上隆介, 濱西潤三, 吉田都美, 万代昌紀, **川上浩司**. 2024. 「悪性腫瘍の診断・治療に伴い身体活動度は低下する：診断前からのライフログデータの解析」, 第 62 回日本癌治療学会学術集会 (福岡), 2024 年 10 月 24 日～26 日, ポスター発表
- 本田宗倫, 高山厚, 吉田都美, **川上浩司**. 2024. 「大腸病変に対する内視鏡的同日治療と後日治療における Post-colonoscopy colorectal cancer の発生に関する検討」, 第 32 回日本消化器関連学会週間 (神戸), 2024 年 10 月 31 日～11 月 3 日, ポスター発表
- 山本竜也, 中尾葉子, **川上浩司**. 2024. 「75 歳以上の切除不能進行・再発胃癌患者に対する 1 次治療としての多剤併用化学療法の有効性: コホート研究」, 日本臨床疫学会第 7 回年次学術大会 (東京), 2024 年 11 月 2 日～3 日, ポスター発表
- 岡澤佑樹, 吉田都美, 武田親宗, 櫻井洸太郎, **川上浩司**. 2024. 「心臓外科手術における希釈式自己血輸血と術後腎代替療法の関連性についての検討」, 日本臨床疫学会第 7 回年次学術大会 (東京), 2024 年 11 月 2 日～3 日, ポスター発表
- Kenichi Fujimoto, Sachiko Tanaka-Mizuno, Kazuo Mishima, Yukinori Sakata, Naoki Kubota, Michinori Koebisu, Toshiki Fukasawa, Kayoko Mizuno, Mika Ishii, Margaret Moline, and **Koji Kawakami**. 2024. “A descriptive epidemiological study of pediatric sleep medications in Japan: A health insurance claims-based analysis”, ISPOR Europe (Barcelona, Spain), 11 月 17～20 日, 2024, ポスター発表
- 松本光太, 佐々木光太郎, 深澤俊貴, 中神由香子, 後藤悠太, 坂本祐輔, 鷺見幸彦, 田中佐智子, 吉田都美, 水野佳世子, 鎌田悠太, 石井美佳, **川上浩司**. 2024. 「若年性アルツイマー型認知症患者の配偶者における精神疾患治療薬の新規使用率」, 第 43 回日本認知症学会学術集会 (福島), 2024 年 11 月 21 日～23 日, ポスター発表

- **Takashi Sekiyama.** 2024. “Climate Security and Defense Diplomacy in the Indo-Pacific”, International Studies Association 2024 Annual Convention, 2024 年 4 月 3 日. 講演
- **関山健.** 2024. 「エネルギー転換の地政学的影響について」, 国際経済学会, 2024 年 10 月 6 日. 講演
- **関山健.** 2024. 「気候変動を遠因とする紛争と社会規範」, 国際政治学会, 2024 年 11 月 16 日. 講演
- **関山健.** 2024. 「安全保障課題としての気候変動」, 国際安全保障学会, 2024 年 12 月 7 日. 講演
- **Carl Becker.** 2024. “Trauma and Healing: What can East-West Philosophers Say or Do about Them?”, East-West Philosophers’ Conference (Honolulu), 2024 年 5 月 31 日, 招待講演
- **Carl Becker.** 2024. “Assessing and Preventing Caregiver Burnout and Costs of Grief”, International Conference on Grief and Bereavement (La Crosse), 2024 年 6 月 4 日, 招待講演
- **Carl Becker.** 2024. “Impact of Funerals on Grieving Bereaved and Society—from an All-Japan Survey”, FIAT-IFTA Convention (Krakow, Poland), 2024 年 9 月 18 日, 招待講演
- **祐野恵.** 2024. 「科学技術政策における博士人材の活用に関する分析：行政官の意識調査を用いて」, 研究・イノベーション学会第 39 回年次学術大会（東京都）, 2024 年 10 月 28 日. 学会報告
- **祐野恵.** 2024. 「健康情報をめぐるポリティクス」, 医療福祉政策学会第 8 回研究大会（京都市）, 2024 年 11 月 30 日. 招待講演
- **池田有梨奈, 小泉志保.** 2025. 「西日本地域における市町村産後ケア事業の提供状況の実態についての記述研究」, 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2025 年 1 月 5 日. ポスター発表
- **森拓也, 渡邊卓也, 當山まゆみ, 小泉志保, 小杉眞司, 中山 健夫.** 2025. 「一般国民における研究倫理に関する関心と説明文書に求める事項の調査」, 日本臨床試験学会 第 16 回学術集会総会, 2025 年 2 月 28 日. ポスター発表
- **小泉志保, 西村多寿子.** 「メディカルライティングに関わる生成 AI シンポジウムの実施報告」, 日本臨床試験学会 第 16 回学術集会総会, 2025 年 2 月 28 日. ポスター発表
- **小泉志保, 染小英弘, 井上悠輔.** 「機能性表示食品の臨床試験論文における全著者貢献の記載状況：メタ疫学研究」, 研究倫理を語る会（グランフロント大阪）, 2025 年 3 月 8 日. ポスター発表

社会活動（講演会・展示会などアウトリーチ活動等）

- **Takashi Sekiyama, Keiko Ikeda.** 2024. 講演「Integrating Digital Technologies into a Career-Building Initiative for Future IT Teleworkers in ASEAN and South Asia」, 2024 Inter-Regional Research Symposium SEAMEO RIHED, 2024 年 11 月 20 日.
- **Takashi Sekiyama.** 2025. 講演「Japan’s Policy Integration of Climate and Human Security」, IGES International Workshop on Climate Security in Asia-Pacific, 2025 年 1 月 31 日.
- **丹羽良太.** 2025. 講演, 令和 6 年度 iACT 再生医療シンポジウム「再生医療の開発を成功に導くための要素とは～見えてきた課題に対して～」(京都大学医学部付属病院 先端医療研究開発機構 (iACT)), 2025 年 2 月 26 日.
- **Carl Becker.** 2024. 講演「人生の第 4 四半期を有意義に、誇らしく過ごすために」, 京都老婦人クラブ, 2024 年 4 月 14 日.
- **Carl Becker.** 2024. 講演「高齢者の救急医療」, 救急医療学会（仙台国際センター）, 2024 年 10 月 14 日.
- **Carl Becker.** 2024. 講演「What we can learn from Japan’s spiritual experiences of life and death?」, Oxford Humans (オンライン), 2024 年 12 月 3 日.
- **Carl Becker.** 2024. 講演「日本的な死生観に基づくグリーフケア」, 大阪太融寺, 2024 年 12 月 15 日.

- **Carl Becker.** 2024. 講演「Why be Buddhist at New Year」, Moiliili Hongwanji (Honolulu), 2024 年 12 月 29 日.
- **Carl Becker.** 2025. 講演「学術研究の方法・考え方と事例紹介」, 園田学園看護学科, 2025 年 2 月 1 日.
- **Carl Becker.** 2025. 講演「The Art of Dying: NDEs in Japanese Buddhism」, A Dialogue between the West and East: In Memory of Peter Fenwick: Oxford Humans (オンライン), 2025 年 2 月 16 日.
- **Carl Becker.** 2025. 講演「Medical System Responses to Climate Disasters: Lessons from Japan」, Climate Change and Death Conference, College of Korean Medicine (Kyung Hee University Seoul Campus), 2025 年 3 月 22 日.
- **宮野公樹.** 2024. 対談「ビジネスもアカデミアも超えた「学び」についてのクロストーク」, 一般社団法人 STEAM Association (VEIL SHIBUYA), 2024 年 4 月 20 日.
- **宮野公樹.** 2024. 話題提供「学会とは何かー学問の在り方を添えてー」, 情報処理学会、電気学会、電子情報通信学会主催:「ミライの学会」を語るシンポジウム ～学会ってなんだろう～, 2024 年 5 月 31 日.
- **宮野公樹.** 2024. 招待講演「これからの研究室ー学問の在り方を添えてー」, 理系 PI をめざすための準備プログラム (東北大学 大学教育支援センター), 2024 年 6 月 15 日.
- **宮野公樹.** 2024. 講義「“学び”の学びについて」, 東京理科大学オープンカレッジ, 2024 年 7 月 23 日.
- **宮野公樹.** 2024. 司会 (女性研究者座談会)・審査員 (ポスターセッション), NIKKEI STEAM SYMPOSIUM, 2024 年 7 月 30 日.
- **宮野公樹.** 2024. 講演「文理融合と価値創出」, 住友ゴム本社, 2024 年 10 月 18 日.
- **宮野公樹.** 2024. ラジオ出演「出展者に聞いてみる企画のココが面白い!」, サイエンスアゴラ 2024 前夜祭, 2024 年 10 月 25 日.
- **宮野公樹.** 2024. パネル登壇「集合知ネットワークを構築する具体的なアクションとは?」, サイエンスアゴラ 2024, 2024 年 10 月 27 日.
- **宮野公樹.** 2024. パネル登壇「豊かな学びとは」, 京都大学学際融合教育研究推進センター全分野交流会 & プレイベント, 2024 年 11 月 29 日.
- **宮野公樹.** 2024. 招待講演「『学際的な学び』とは何か」, 市川中学校・市川高等学校 SSH 授業研究会, 2024 年 11 月 30 日.
- **宮野公樹.** 2024. 講演「これからのビジネスとアカデミアの本質的關係」, 京大 ELP 特別講演, 2024 年 12 月 14 日.
- **宮野公樹.** 2025. 講義「ほんとうの学びとは」, 京都大学 ELP 説明会, 2025 年 1 月 14 日.
- **宮野公樹.** 2025. 講義「学ぶを学ぶ」, 東京理科大学オープンカレッジ, 2025 年 1 月 23 日.
- **宮野公樹.** 2025. 講義, 京都大学 ELP10 周年記念大会大リフレクション, 2025 年 3 月 8 日.
- **宮野公樹.** 2025. 基調講演, 令和 6 年度 鎌倉湘南地区「探究的学習発表会」, 神奈川県立藤沢西高校, 2025 年 3 月 12 日.
- **祐野恵, 安藤加菜子.** 2024. ポスター発表「霞が関の博士人材」, 京都大学アカデミックデイ (京都市), 2024 年 9 月 21 日.
- **祐野恵.** 2025. 講演「研究開発評価を巡る現在の状況」, 文部科学省主催令和 6 年度研究開発評価人材育成研修 (東京都), 2025 年 1 月 21 日.
- **小泉志保.** 2024. 企画立案・運営, パネル司会. 日本メディカルライター協会 第 24 回シンポジウム「生成 AI とともにある未来～その可能性と課題～」(オンライン), 2024 年 9 月 10 日.
- **小泉志保.** 2024. 招待講演「国内製薬会社のデジタル技術活用状況」, NPO 法人日本翻訳者協会 KAT & JATPHARMA 合同関西セミナー (大阪), 2024 年 10 月 19 日.

- 小泉志保, 石木剛, 古谷祐一, 北村奨, 荒木康弘. 2024. シンポジウム座長「デジタル技術の活用や新たな platform 導入による薬事文書のあるべき姿」, 第 21 回 DIA 日本年会 (東京ビッグサイト), 2024 年 10 月 29 日.



公共圏における科学技術 活動報告 2024

2025年7月31日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)

URL <http://stips.jp/>

E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp